

元総社明神遺跡 I

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財確認調査概報

昭和57年度

前橋市教育委員会

序

元總社明神遺跡の所在する元總社の地は、国府の設置以降、古代から中世に至るまで、上野国の歴史の表舞台として幾多の興亡を経験してまいりました。

元總社の地にたたずみ遠く周囲を見わたしますと、赤城・子持・小野子・榛名の山塊が雄容としてあたりを睥睨する觀があり、往古には古利根川が現在の広瀬川低地帯のあたりを、東流する雄大な光景が眼前に浮びます。それゆえに、この地こそまさしく山葉永明・四神相応の地として、古代人が国府の適地にと選んだのもうなづける気がします。

元總社明神遺跡は、国府の推定東外都線に沿うようにして、前橋都市計画事業西部第三明神地区土地区画整理事業が策定されたために、それに先立って、国庫・県費補助金を受けて確認調査を行ったものです。

調査の結果、古墳時代住居跡群と平安時代住居跡群が確認され、国府周辺地域の状況をある程度推定できる資料を得ることができました。

ここに、記録保存という次善の策ながら、本確認調査報告書が発刊のはこびとなり、本報告書が今後の埋蔵文化財保護の一助となれば幸いです。

最後に、御協力を頂きました地権者、区画整理審議会委員、宅地開発課の担当者及び寒風吹きすさぶ中で直接発掘調査に携わった調査担当者、作業員の方々に厚く御礼申し上げます。

昭和58年3月31日

前橋市教育委員会

教育長 金井博之

例　　言

- 本書は、前橋市都市計画事業元総社西部第三明神地区土地区画整理事業に係わる前橋市元総社町字匿敷に所在する元総社明神遺跡の確認調査概報である。
- 確認調査は、元総社西部第三明神地区土地区画整理事業に先立つて、道水路部分その他に対して、前橋市教育委員会が実施したものである。
- 調査は、1982年9月22日から12月25日までの96日間にわたって実施された。
- 調査は、前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係職員片田治男、井野誠二、前原豊、江部和彦、木暮誠が担当した。また庶務の労を本部日出夫、布施和男にお願いした。
- 本書の執筆・編集は、5名の担当者の討議の上、岸田が行った。また、遺物整理・復元には、中村きぬえ、阿部良子、湯浅礼子、遺物実測には新保一美、湯浅たまえ、渡木秋子トレースは湯浅道子の手をわざわざした。
- 本遺跡の資料は、前橋市教育委員会の責任下に保管されている。
- 発掘調査協力者は次の方々である。

青木鶴秋、阿部イチエ、阿部良子、飯田五郎、大木道子、小野田徳一、岡田カツ子、
今子栄一、小林トシ子、沢田方子、柴崎文江、清水厚美、清水秀美、須藤マツ江、
住谷静子、住谷文彦、都木美智子、高島康、千明香根子、渡木秋子、中村きぬえ、林次夫、
水野キクエ、三田貞三、森田博治、横沢房江、湯浅たまえ、湯浅道子、湯浅礼子

凡　　例

- 各遺構の略号は次の通りである。

H…土師器使用住居 D…土坑 W…溝状遺構 I…井戸跡 P…ピット

- 各遺構実測図の縮尺は、住居跡 $\frac{1}{100}$ 、墓 $\frac{1}{50}$ 、溝 $\frac{1}{50}$ を原則とした。

- 遺物実測図は $\frac{1}{4}$ を原則とし、大型須恵器のみ $\frac{1}{8}$ とした。

- 遺構及び遺物擇図中のスクリーントーンは次のことを表わす。



焼土範囲



灰釉陶器の
施釉部分



絵釉陶器の
施釉部分



内黒処理の
内黒部分



須恵器の断面



地　山

- 本文中の「GH-7」は、Gトレンチ7号住居跡を示す。同様に「BW-1」はBトレンチ1号溝、「AD-3」はAトレンチ3号土坑、「2I-3」は2トレンチ3号井戸、「8P-30」は8トレンチ30号ピットを示している。

目 次

序	
例 言 凡 例	
I 遺跡の立地と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
・周辺遺跡	1
・上野国府について	3
II 調査の経過	6
1. 調査の経緯	6
2. 調査の概要	7
・調査の方法	7
・調査の進行及び結果	8
III 図 序	9
1. 基本図序	9
2. 各トレンチセクション図	9、10
IV 各トレンチの造構及び遺物	11
1. 1トレンチ	11
2. 2トレンチ	13
3. 3トレンチ	15
4. 6トレンチ	16
5. 7トレンチ	17
6. 8トレンチ	19
7. Aトレンチ	22
8. Bトレンチ	22
9. Cトレンチ	23
10. Gトレンチ	25
V 発掘遺構 (Gトレンチ)	27
1. GH-2号住居跡	27
2. GH-7号住居跡	30
3. GH-3号住居跡	34
4. GW-2号溝	36
VI 結 語	38

挿図目次

- 第1図 前橋市の地形区分図 1
 第2図 道跡の位置 2
 第3図 上野国府関係図 4
 第4図 推定国府域における古瓦散布 5
 第5図 元総社周辺遺物表採図 6
 第6図 元総社明神遺跡トレンチ設定図 7
 第7図 基本上図 9
 第8図 各トレンチセクション図 9、10
 第9図 1トレンチ全体図 11
 第10図 1トレンチ出土遺物実測図 12
 第11図 2トレンチ全体図 13
 第12図 2トレンチ出土遺物実測図 14
 第13図 3トレンチ全体図 15
 第14図 3トレンチ出土遺物実測図 15
 第15図 6トレンチ全体図 16
 第16図 6トレンチ出土遺物実測図 17
 第17図 7トレンチ全体図 18
 第18図 7トレンチ出土遺物実測図 18
 第19図 8トレンチ全体図 19
 第20図 8トレンチ出土遺物実測図 20、21
 第21図 Aトレンチ全体図 22
 第22図 Aトレンチ出土遺物実測図 22
 第23図 Bトレンチ全体図 23
 第24図 Bトレンチ出土遺物実測図 23
 第25図 Cトレンチ全体図 23
 第26図 Cトレンチ出土遺物実測図 24
 第27図 須恵大甕実測図 25
 第28図 Gトレンチ全体図 25
 第29図 Gトレンチ出土遺物実測図 26
 第30図 GH—2号住居跡実測図 27
 第31図 2号住居セクション図 28
 第32図 2号住居藏穴セクション図 28
 第33図 2号住居出土遺物実測図 29
 第34図 GH—7号住居跡実測図 30
 第35図 7号住居実測図 30
 第36図 7号住居藏穴セクション図 31
 第37図 7号住居出土遺物実測図 32
 第38図 GH—3号住居跡実測図 34
 第39図 3号住居実測図 34

- 第40図 3号住山上遺物実測図 35
 第41図 GW—2号溝出土遺物実測図 36
 第42図 GW—2号溝実測図 37
 第43図 古墳時代後期住居跡の方位 39
 第44図 平安時代住居跡の方位 39

付表目次

- 第1表 周辺遺跡 2
 第2表 上野国府に係わる溝論及 5
 第3表 遺物表採結果 6
 第4表 発掘調査経過表 8
 第5表 2号住土器觀察表 29
 第6表 7号住土器觀察表 33
 第7表 3号住土器觀察表 35

図版目次

- 図版1 1トレンチ出土遺物 12
 図版2 2トレンチ山上遺物 14
 図版3 3トレンチ山上遺物 15
 図版4 6トレンチ山上遺物 17
 図版5 7トレンチ山上遺物 18
 図版6 8トレンチ出土遺物 21
 図版7 Aトレンチ出土遺物 22
 図版8 Bトレンチ出土遺物 23
 図版9 Cトレンチ出土遺物 24
 図版10 Gトレンチ出土遺物 26
 図版11 2号住・遺物全体・遺物山土状況 27
 図版12 2号住窓・貯蔵穴 28
 図版13 2号住出土遺物 28
 図版14 7号住造構全体・遺物出土状況等 30
 図版15 7号住貯蔵穴 31
 図版16 7号住出土遺物 32
 図版17 3号住造構全体・遺物出土状況等 34
 図版18 3号住出土遺物 35
 図版19 2号溝出土遺物 36
 図版20 2号溝造構全体・遺物出土状況 37
 図版21 遺物地全景、遺跡地近景 41
 図版22 1トレンチ全体、2トレンチ全体 42
 図版23 3トレンチ全体、6トレンチ全体 43
 図版24 7トレンチ全体、8トレンチ全体 44
 図版25 Aトレンチ全体、Bトレンチ全体 45
 図版26 Cトレンチ全体、Gトレンチ全体 46

I 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合谷をへて関東平野をのぞむところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）と両者の地溝状をなす冲積低地（広瀬川低地帯）、⁽¹⁾および現利根川氾濫原の四地域に分けられる。

赤城火山斜面は平均勾配2度内外でローム層（気成）におおわれ、放射谷はかなり密に発達しているが比較的新しいものが多く、尾根にあたる部分には縄文時代以来人間の営みが繰り返されている。⁽²⁾

元総社明神遺跡の立地する前橋台地は、浅間火山に発するといわれる前橋泥流堆積物が原面上をおおい、前橋市の北西端にあたる清里地域で榛名火山東麓斜面と移行部を形成し、微地形的には多少の起伏をもってはいるがほとんど平坦な台地面といえる。

前橋台地面の水系をみると、榛名山水系の諸河川が裾野を開拓し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高3m～5mをはかり、段丘崖上は高燥な台地で、桑園や畠地が続く景観を呈している。また、この台地上は格好的居住地であったらしく、古墳時代から奈良・平安時代にかけて多くの遺跡が残されている。⁽³⁾

元総社明神遺跡は、前橋市元総社町に所在し、上越線新前橋駅北方約1kmの地点である。遺跡地は、群馬郡群馬町東牛池沼に発し、元総社町南部字落合で染谷川に合流する牛池川の台地上に占地している。台地はほとんど起伏がなく、現状では桑園を主とした畠地が広がり、周囲の市街地とは景観を異にしている。この台地の西側は牛池川に向ってゆるやかに傾斜し、その比高は3m～4mをはかり、対岸の段丘上には総社神社が鎮座している。一方、本遺跡地の北・東・南側は市街地化が進み原状を明らかにすることはできないが、東南方へ向ってわずかずつ傾斜している地形がうかがえる。

（註1）尾崎喜左雄、新井房夫他、「前橋市史」第1巻 1971年 前橋市

（註2）中沢充裕、布施和明、杉浦つや子「検査遺跡」1981年 この他、報告書は未刊だが芳賀園地遺跡群で縄文・古墳・奈良・平安時代の遺構が多数検出されている。

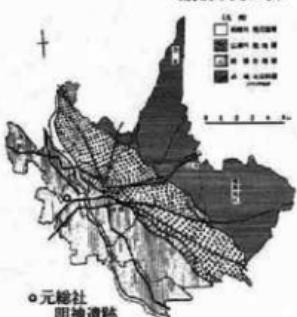
（註3）関越自動車道の建設に伴って、その道筋にあたる鳥羽遺跡、国分寺中間地域遺跡、北原遺跡等の調査が行われている。

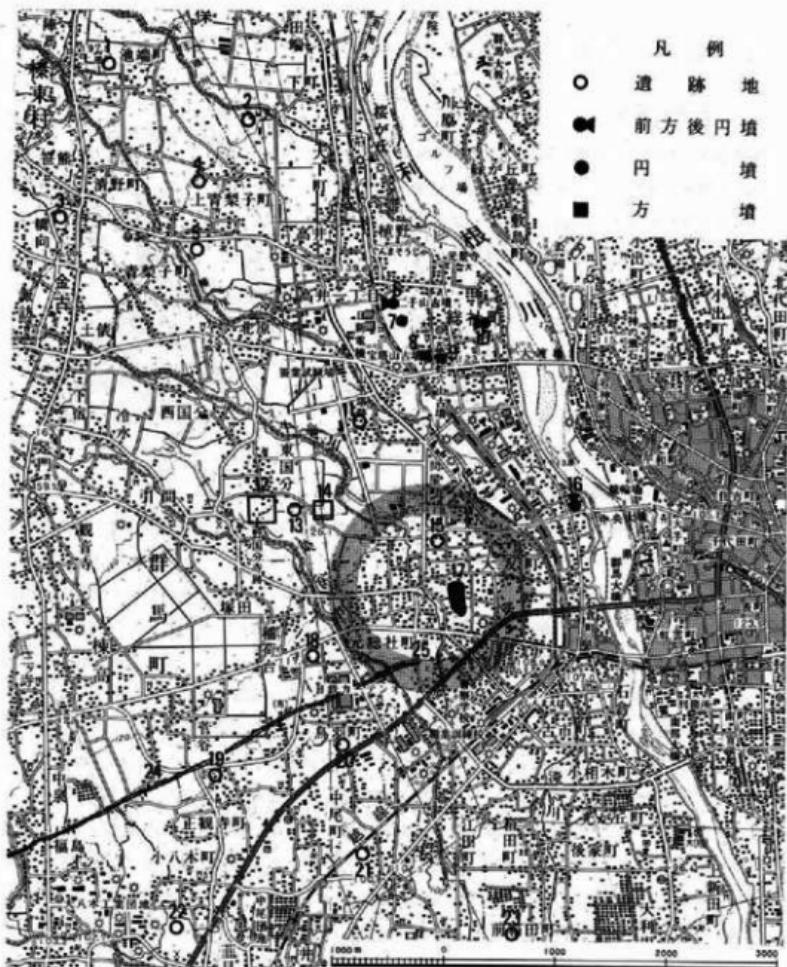
2. 歴史的環境

周辺遺跡

元総社明神遺跡周辺がにわかに時代の脚光を浴びて上毛野国の中に躍り出たのは、上野国府の設置に始まるといえる。が、その前史である縄文・弥生・古墳時代にも、花開く時代への萌芽が着

第1図 前橋市の地形区分図
(前橋市史より)





第2図 遺跡群の位置

第一表 周辺遺跡

1 清里・陣馬遺跡	7 愛宕山古墳	13 国分寺中御物古跡	19 正観寺遺跡
2 長久保遺跡	8 宝塔山古墳	14 国分尼寺	20 中尾遺跡
3 長久保古墳群	9 蛇穴山古墳	15 開泉橋遺跡	21 日高遺跡
4 庚申塚遺跡	10 遠見山古墳	16 山王古墳	22 大八木遺跡
5 清里跡・中島遺跡	11 山王廃寺	17 元總社明神遺跡	23 前箱田遺跡
6 總社二子山古墳	12 国分僧寺	18 鳥羽遺跡	24 推定東山道
			25 推定國府範囲

々と準備されていた。

しかしながら、本遺跡地周辺の縄文・弥生時代造構の報告例はわずか2・3例にとどまり、その様相の解明は後日の調査をまたねばならない。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を表わすのは、6世紀前半利根川右岸の段丘上に、川原石を用いて構築された積石塚である王山古墳を嚆矢とする。その後、遺跡地の北約2kmには、總社古墳群が国指定史跡で前方部と後円部の双方に石室を有する總社二子山古墳を筆頭に、巨石使用的横穴式石室をもつ愛宕山古墳、主軸長70mをはかる遠見山古墳、また、県内最終末期と考えられ、仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳と蛇穴山古墳など陸続と形成される。宝塔山古墳の南西約500mに所在する山王廃寺塔心礎は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられており、そのことから白鳳期の建立とされる山王廃寺を中心にして、總社、元總社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子が窺える。

奈良・平安時代になると、國府や國分寺の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上毛野の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。國府については、3次にわたる発掘調査と戦前からの研究史がある（第2表）。國分寺は、大正15年に國指定史跡となり、昭和40年代になると道路の拡幅や設置のために、部分的ながら発掘調査が進められるようになった。そして、昭和48年度からは史跡地の公有化が始まり、整備計画が策定された。國分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降56、57年度と発掘調査が進められ、各種造構の礎石、築地、堀などが確認されている⁽¹⁾。國分寺周辺では、この数年来、関越自動車道建設にともなう発掘調査が進められており、道筋にあたる中尾遺跡、鳥羽遺跡、國分寺中間地域遺跡からは、奈良・平安時代の住居跡が大量に発掘されている。このことからも、奈良から平安時代にかけて当地では爆発的に集落の拡大した様子が理解される。

（註1）清里南部遺跡群（縄文）、小八木遺跡、正觀寺遺跡、口高遺跡（弥生）がある。

（註2）崎嶋喜左雄他「前橋市史」第1巻 1971 前橋市

（註3）松島栄治「上野國分尼寺跡発掘調査報告」昭和45年度調査概報1970年、群馬県教育委員会
井上唯雄「上野國分寺周辺地域発掘調査報告—僧寺、尼寺中間地域の考古学的検討—」1971、群馬県教育委員会

井上唯雄、大江正行「上野國分僧寺寺域縁辺の調査」1975、群馬町教育委員会

（註4）前沢和之「文化財のつどい」1982、群馬県教育委員会

上野國府について

大化2年（646）の改新の詔の二に「初備京師...置、畿内國司郡司...」（日本書紀卷25）とあり、新國司制度とともに國府の大部分が新設されたものと考えられている。ところが、それに先立って東國への國司の任命は大化元年（645）になされ、上毛國へは紀麻利善光臣⁽¹⁾が守となってきた。その後、和銅元年（708）の田口朝臣益人の任命までの63年間にについては何の記載もない。

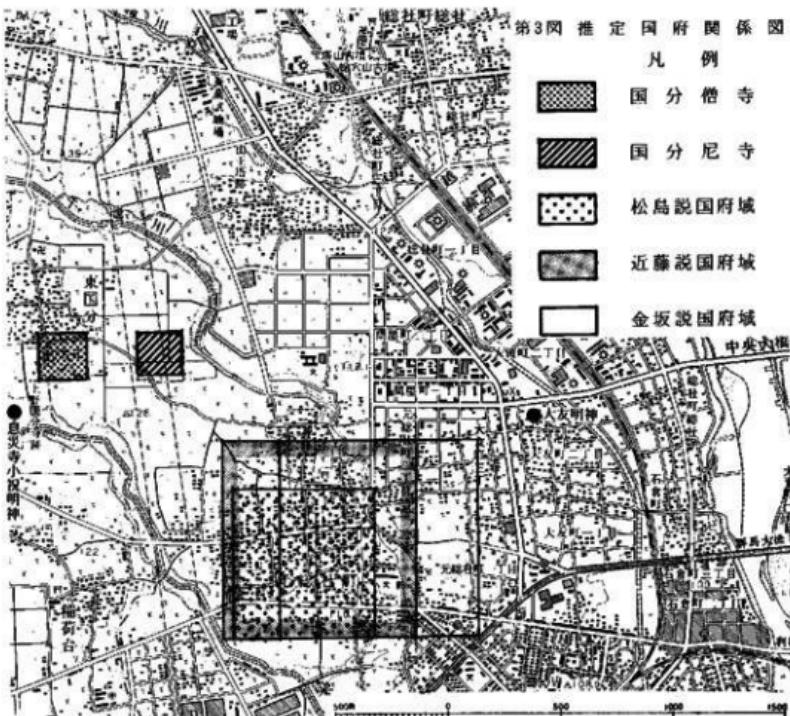
上野國府についての記述の初見は『倭名類聚鈔』に「上野國、國府在群馬郡...」とあり、その所在地については「群馬西二郡府中間國府」とあるものの、詳細な位置については語られていない。⁽²⁾そのため先学諸氏は「上野國神名帳」の研究から、神名帳記載の東西群馬郡の神社を現存する神社にあて（東郡には大伴明神一大友神社があり、西郡では息災寺小祝明神妙見寺、学校院若御子明

第3図 推定国府関係図

凡例

- 国分僧寺
- 国分尼寺
- 松島説国府域
- 近藤説国府域
- 金坂説国府域

中央内構



神一御靈社がある)、現在の前橋市大友町と元総社町付近が東西群馬郡の境界であるとし、元総社付近を上野国府跡と想定している。また、これまでの上野国府に係わる諸論では、そのほとんどが前述の研究を前提としている。そこで、上野国府推定地についてどのような論調がなされてきたのかを略述して、上野国府に関するこれまでの研究の概要を第2表に示した。

(3)

前橋市教育委員会は、昭和54年11月中旬～下旬にかけて元総社の表面採集調査を実施した。その結果、土師器・須恵器・鉄滓・灰釉陶器・布目瓦等が採集された。特に布目瓦に注目しその散布地を地図におとしたのが第4図である。この図から、布目瓦の散布はほぼ方8町の区域を囲む形で認められる。そこで、微地形や付近の遺跡との位置関係から推定国府域を設定してみると第4図の範囲となる。方8町の中心線を蒼海城本丸跡東の堀の南北延長線とし、東限を八日市場城址の堀付近、南限を釈迦尊寺より南の丘陵地が切れる付近にあててみたが、作業誤りで多分にあろう。

(4)

加えるに、昭和58年2月元総社町字関泉橋南で行った関泉橋遺跡緊急発掘調査で、N-89°Eの方向に走る大溝を確認した。この大溝は上幅7m、下幅4m、深さ2mを測り、覆土は自然堆積状態を示し、上部に浅間B輕石の純層が認められた。出土遺物と覆土の状態から推測すると、この大溝の埋没開始時期は10世紀前葉と考えられる。推定国府域作業線北限にごく近い地点であり、10世紀前葉の国府衰退期に近接する埋没年代を持つこの大溝の存在は興味ある事実である。

第2表 上野国府に係わる諸論文

著者名	論 文	開 墓 論	発 表 年	國 所 検 定 地
盛木光作	國府政治の歴史について 上毛及上人地12号		1927	元禄村の中央通路石神社を正門跡としている。
	上野国府の衙地について 土 壟 会 著 第 1 編		1917	通説。源タ、父タ、中世道筋の田舎町の4つの立場から、上野国府の衙地を推定し、神奈今と西郷寺を経て上野殿とした方を唱和させた。
	上 野 国 府 に つ い て 上 野 国 府 を め ぐ る 地 名 史 学 会 報		1954	同上
	上野国府をめぐる古代交通路 信濃第33合第2号		1981	同前に係わる史的な地名を詳しく考察
紀崎春吉延	國府跡地究明のための調査 新潟市史部1集		1971	これまでの歴史的資料から、既往今更の南北に走る高瀬川東西の勢力有りの国府地定説となってきた。そこで南北の勢力を外郭都と考え、その北側の最高点を標記45年の高瀬城址に立ち、それより南側の本城が渾れる付近でを本城の跡とし方針を定めた。
金原 哲司	上野国府とその付近の東山道 交 通 の 駿 ま だ 地 境 及び範囲、位置記述について (歴史地理学研究会)		1974	元禄時代初の地圖の同時から第3回のよう進歩的変遷を尋ねてある。
松島 宏治	上 野 一 市 旗 旗 旗 史 公 集 36		1976	國分僧寺の東側からへら町、御へり町といったところから、山田町へといたるところといたる方向を結ぶこととした。(第3回) 並河義久と並んで。
野川義夫	東京一山山道の源流一 佐渡郡東村越		1979	金沢道を含めて3年間丁々じ、周囲の山脈を水丸、二ノ丸、三ノ丸等の形で示す。また、下野原、山田原、身代原等を記す。その北の通路に設定し、周囲の山アリを手次江と並河の筋に記める。
川原義久治	長 定 上 野 一 市 旗 旗 史 公 集 36		1980	古式の分合、十世と海をめざせん工丁、正統詔令等す る。國府の存在をめざせる石造寺の邑名から葛城を主心とした駿城を認めた。



第4図 推定国府域における占瓦散布状況

- (注1) 藤岡謙二郎
「国府」1969年
吉川弘文館
- (注2) 尾崎喜左雄
近藤義雄、松島栄治
氏等の研究がある。
- (注3) 中村富夫、
中沢充裕、唐沢裕美
(前橋市教育委員会
社会教育課文化財保
護係職員)
- (注4) 前原豊、鶴
木晋一、町田信之
「閉泉橋遺跡」前橋市
文化財調査報告書第
13集 1982、前橋市
教育委員会

II 調査の経過

1. 調査に至る経緯

昭和48年9月、前橋市都市計画課長より教育委員会社会教育課長あてに「都市計画道路(中央大橋線)の変更に伴なう埋蔵文化財の現地調査をしてほしい」という依頼があった。そこで、市教委が同年10月中旬元総社地区遺物分布状況調査をした結果、第5図・第3表のようなことが確認された。

その後、昭和53年9月、前橋市長より教育長あてに「元総社地区区画整理事業(仮称)に係わる埋蔵文化財の取扱い」について意見を求めてきた。それに対して市教委では、①蒼海城跡、上野国府跡については現状保存を要望する。②多量散布地については発掘調査、少量散布地は遺物・遺構が発見された場合には調査をするという回答を提出した。

引き続き、昭和54年12月、56年7月、10月と協議が重ねられた。そして、昭和57年度国庫補助金を受けて、前橋都市計画事業西部第三明神地区土地区画整理事業に先立つ調査の依頼が、昭和57年6月1日付の文書をもって市都市区画整理部宅地開発課より市教委あてにあった。昭和57年7月以後、その依頼を受けて宅地開発課と市教委担当者との間で協議が行われた。その間、地権者に対する前後3回の説明会を実施し、確認調査承諾書の提出を求めた。こうした経過から、確認調査は昭和57年9月22日に開始し、同年12月25日まで続けられた。

第5図 元総社地区遺物表探査状況図

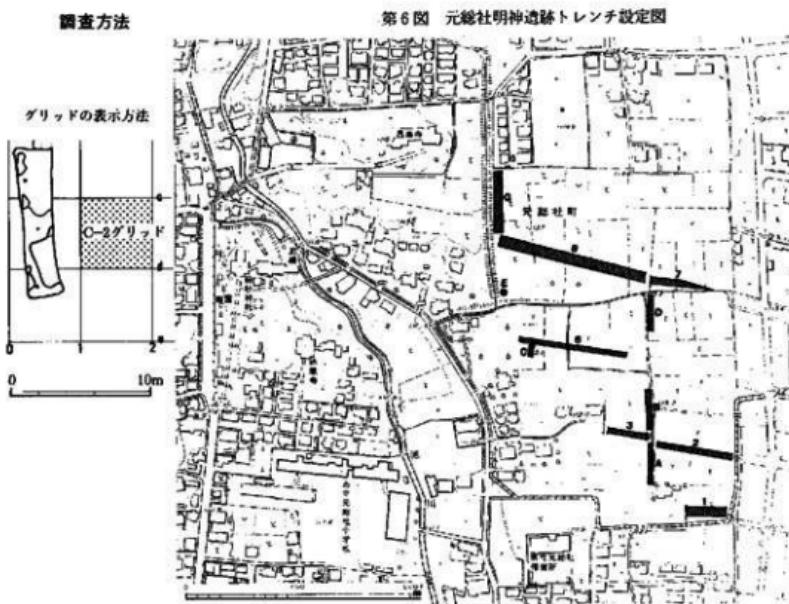
第3表 遺物表探査結果

番号	遺物の種類	面積
1	土器群・瓦器群・布 目瓦散在	約 2.1ha
2	“	3.7
3	土器群・瓦器群散在	1.9
4	“	0.5
5	“	1.5
6	土器群・瓦器群・布 目瓦散在	0.5
7	土器群散在	1.0
8	土器群・瓦器群・布 目瓦散在	3.9
9	“	3.7
10	“	1.0
11	土器群・瓦器群散在	3.0
12	土器群・瓦器群・布 目瓦散在	2.6
13	土器群・瓦器群散在	0.7
14	“	1.2
15	土器群・瓦器群・布 目瓦散在	1.5
16	土器群・瓦器群散在	3.8
17	土器群・瓦器群・灰 陶器散在	2.2
18	元総社小堀跡(歴史 文化財)	0.5
19	土器群・瓦器群散在	6.0
20	土器群・瓦器群・灰 陶器散在	4.8
21	“	1.1
22	土器群・瓦器群散在	0.5
合計		約 47.1ha



2. 調査の概要

調査方法



昭和57年7月～9月にかけて、宅地開発課と市教委担当者との間で数回にわたって具体的な打ち合わせを行った。内容は、1)確認調査は道水路部分及び周辺地域を中心とする。2)トレントを入れて造構を検出した場合、拡張する範囲は道水路内及びその造構確認範囲とする。3)堆土は道水路内で極力始末する等の地権者と宅地開発課との、以前からの申し合わせに沿った非常に制約の多い困難なものであった。

調査は9月22日に開始された。トレントは、東西方向トレントに算用数字、南北方向トレントにアルファベット文字をつけ名称とした(第6図)。なお、欠落している番号は58年度確認調査予定地のものである。

確認調査を行うにあたって、各トレントごとに道路中心軸を結ぶ線をグリッド基本線として、5m間隔にトレント中心杭を打ち、5m四方のグリッドを設定した。原則として、道路中心杭をZ・0とし、縦軸をアルファベット文字、横軸を算用数字で表わし、グリッド名は縦軸と横軸の交点を左下のグリッド名と決めた。

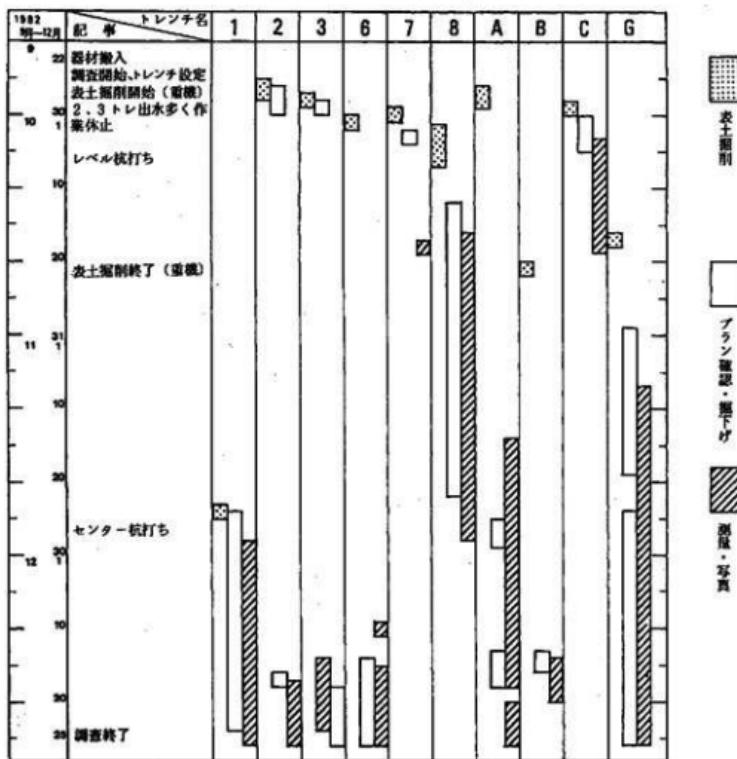
確認調査は、まず重機を使って表土を取り除き、その後ジョレンを用いて造構確認を行った。造構はそのほとんどが黒褐色土層を掘りこんで築成されている上に、覆土も類似した土であるため、造構確認作業に多大の労力を要し、遺跡地東南の1トレントや2トレントでは、すぐ近くを用水が流れており、水路の増水時には出水が多く、一時調査を休止せざるをえない状態もあった。

調査の進行及び結果

確認調査は、昭和57年9月22日から12月25日までの3ヶ月間にわたって実施された。途中、雨天等で作業中止した日数を除くと、71日間の実労働日数である。

調査は秋口から初冬の時期にあたり、比較的天候に恵まれはしたものとの土の判別に四苦八苦の毎日であったために、思うような進行を見せず焦りさえ感じた。特に、1トレンチでは、遺物は出土されども遺構は姿を見せず、2・3トレンチでは、出水によって泥沼のような状態を現出した。その上、9・10月段階では、作業員数が平均10人前後と集まりが悪く遅々として進まない日もあった。

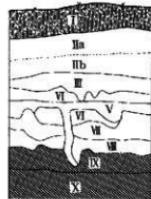
そこで、元総社公民館を通じて元総社地区に作業員募集要項を配布したところ、かなりの数の応募があった。そして、11月より平均17~18人の体制で調査にのぞむことができるようになり、現場に活気がみなぎるにつれて、作業のピッチもおのずからあがるようになった。ところが、前半の諸々の要因による遅れがかなりの負担となり、最終日の12月25日まで遺物取り上げ、写真撮影を行うといった筋走らしいあわただしさの中で調査を終了した。



第4表 発掘調査実経過表

III 層序

1. 基本層序



第7図

I 暗灰褐色土層 微粒ではほとんど軽石を含まない。
乾くとほこりとなる。繊りなし。

IIa 暗灰褐色土層 軽石を若干含み、I層より繊り
がある。

IIb 暗灰褐色土層 IIa層と同様だが軽石の量が多い。

III 暗灰褐色土層 軽石が多く含まれている。II層
より幾分黒味がはかっている。

IV 極色土層 従2mm以上の軽石が多く入ってい
る。粘性、繊りともにあり。

V 暗褐色土層 ポロボロした土質で、軽石を大
量に含む。

VI 黒褐色土層 V層と同質だが黒っぽい。

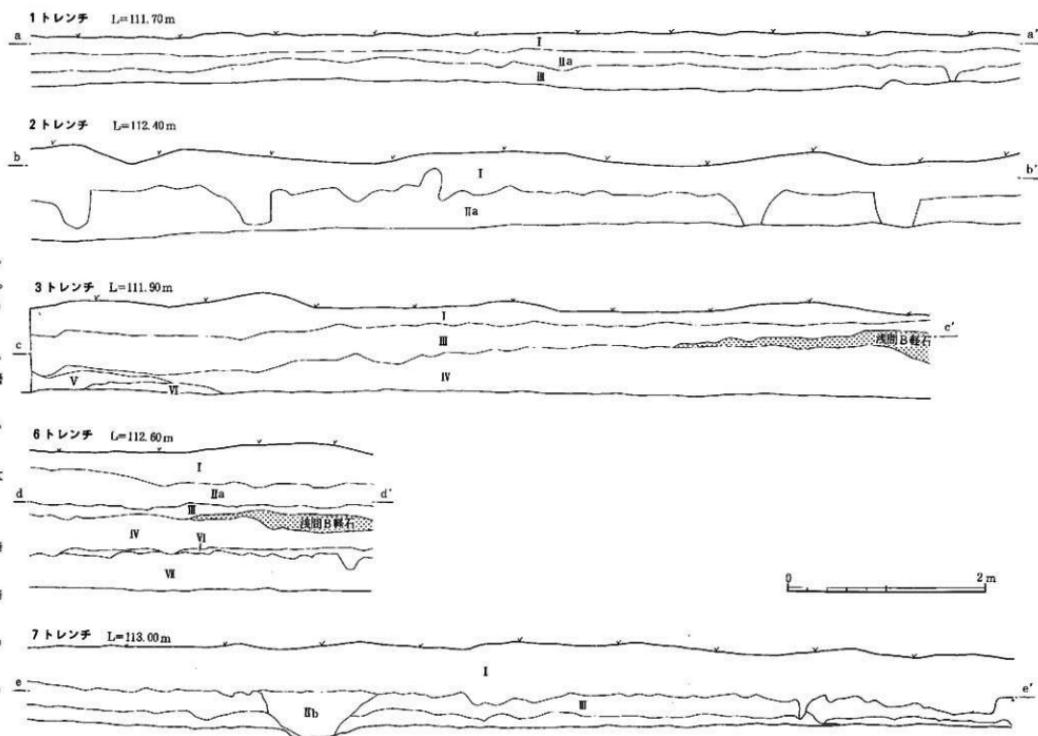
VII 黒色土層 軽石をわずかに含み、粘性・繊
りともにあり。

VIII 黄灰色土と黒
ローム漸移層であり、粘性・繊
色土の混土層
りともにあり。

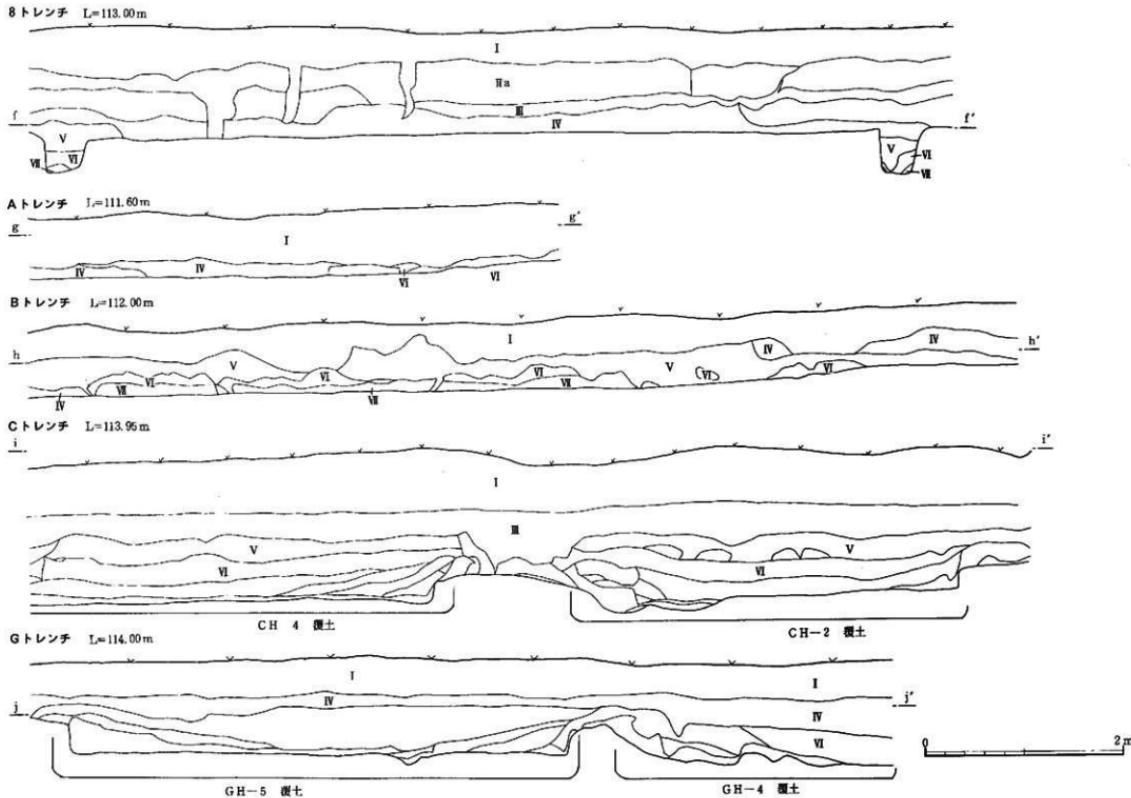
IX 黄灰色土層 斑点状に赤褐色を呈した鉄分の
凝集分を含む。(水成ローム層)

X 砂質ローム層 赤褐色を呈し、砂質でポロボロ
している。

2. 各トレンチの上層セクション図 (1) 第8図

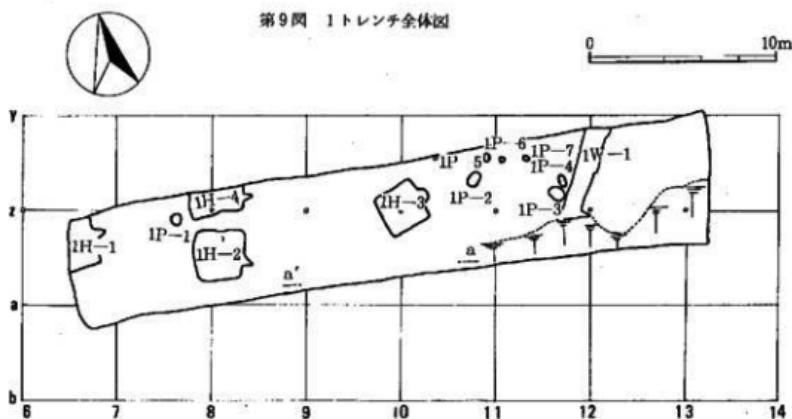


各トレンチの土層セクション図 (2)



IV 各トレンチの遺構および遺物

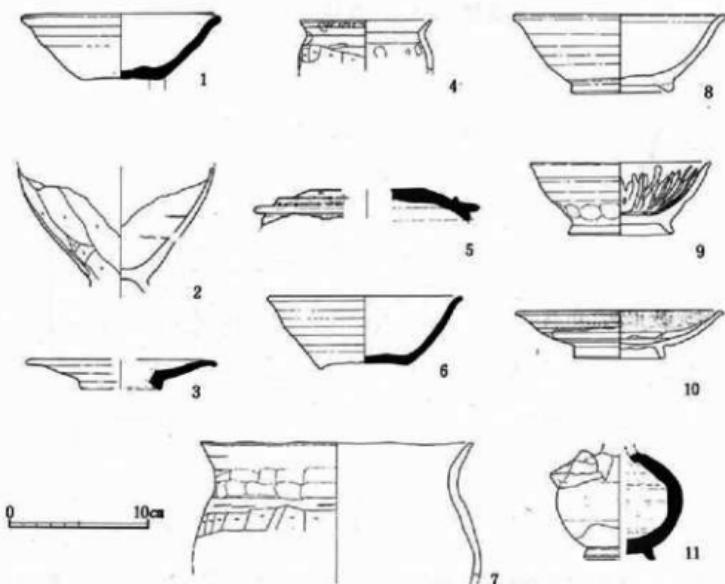
1. 1トレンチ



1トレンチは元總社明神遺跡の最南端に位置し、舌状微高地の先端に占地する。この微高地の西は葦の生えた湿地であり、南は用水を隔てて水田が存在し、東は市街化されて旧地形を留めない。

本トレンチは、平安時代住居跡4軒と溝1条、ピット6を確認した。遺構は覆土と類似した砂質黒褐色土を掘りこんで築成されており、遺構の判別が困難であった。そこで、遺物散布密度の濃い部分を中心に住居プランの確認に努めた結果、床面に極く近い所で、うっすらと赤味を帯びた焼土と電油石（川原石、砂質凝灰岩）を検出した。確認された4軒の住居跡は、一様に竈を東壁に据え、規模・形状とも同様な傾向を示している。この4軒の住居跡は遺物の様相から、それほど隔たった時期のものとは考えられず、この住居跡群は北へ展開してひとつの集落を形成することが予想される。また、本トレンチの東辺をほぼ南北に走る溝（1W-1）は、一部が浅間B輕石によって被覆されていて、南の低湿地へと落ちこんでいる。

遺物は表土はぎをした時点から続々と検出され、遺構確認面まで何層も重なって出土した。また、遺物の散布は、住居跡周辺とともに、y・11G、y・12Gのピット周辺にも多かった。土師器はコの字口縁甕(4)と小型甕、高环(2)が出土している。須恵器では高台碗（1.7）、蓋坏(6)、長頸瓶（11）がある。高台碗は、双方とも高台が欠けて焼成の甘い軟質灰白色須恵器である。蓋坏と長頸瓶はともに自然釉がかかって焼成堅緻だが、蓋坏は暗緑色の釉がべつとりとしているのに対し、長頸瓶は肩部にうっすらとかかる程度である。その他に、灰釉陶器と土師質土器がある。灰釉は高台皿（11）で、ドブ潰け底部へラ調整である。また、土師質土器には高台皿(3)と高台碗（8.9）がある。高台皿の外面はいぶしたような黒色を呈し、焼成は甘く軟かい。高台碗はどちらも底部回転糸切りで、特に9は内面黒色土器で暗文を有し、清里陣馬遺跡における「碗B」に該当するものと思われる。

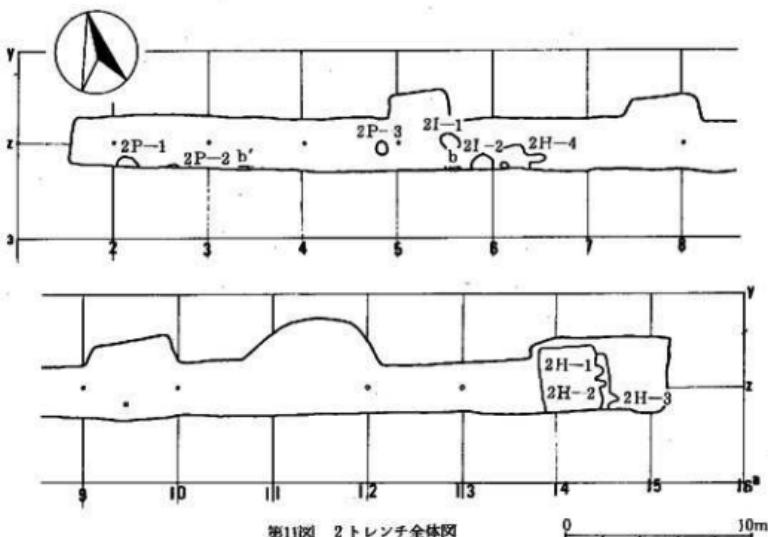


第10図 1トレンチ出土遺物実測図
(1号住、1、2号住2、3、7、3号住4、5、4号住、6、表様8、9、10、11)



図版1 1トレンチ出土遺物

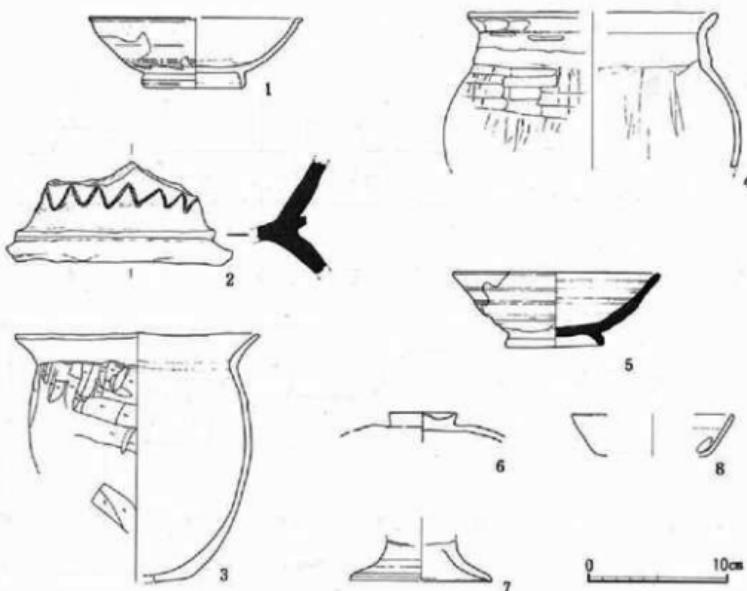
2. 2トレンチ



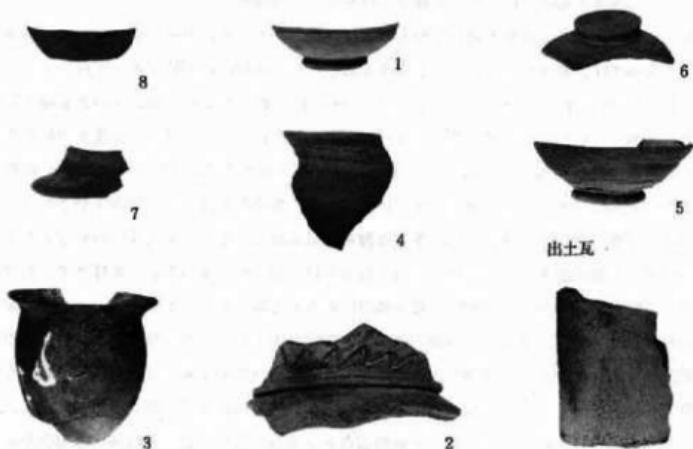
2トレンチは、本遺跡地最南端の1トレンチの北50mに位置する。本トレンチは、1トレンチの南を流れる用水がすぐ東を南流しているため、トレンチ東部分は出水が多く調査が困難であった。そのため、一時休止期を置いた後、乾燥するのをまって再調査した。

遺構は、耕作土層下の砂質黒褐色土層をはぎにかかったところ、中程で焼土と遺物数個体が検出され、平安時代住居跡4軒と井戸2、土坑4を確認した。東端の住居跡3軒（2H-1, 2, 3）は重複しており、切り合いから H-3 > H-2 > H-1 と新しくなる。庵は4軒とも東壁に築かれ比較的良く焼けていたため、焼土をたよりにプラン確認を行った。1号井戸は覆土中に灰を多量に含むと同時に礫散布も多く、2号井戸は H-4 を切って振りこまれていた。この住居跡群も、1トレンチ付近から2トレンチを経て、さらに北へのびて集落を形成することが予想される。

遺物は、重複した3軒の住居付近に多量な散布が見られた。また、Z・3GのピットとZ・6Gの井戸周辺にも散布が多かった。特に注目されるのは、高台壇の量の多さと多様さで、須恵器、灰釉陶器、土師質土器を含み、遺物出土量全体の1/3を占める程である。土師器は、コの字口縁壺(3)と口縁部が大きく外反した壺(8)、脚付壺の脚部(7)、壺(6)が出土している。須恵器には、焼成堅密で暗灰色底部へラ切り未調整の自然釉のかかった壺(2)と軟質灰白色を呈する高台壇(4)や蓋壺がみられる。土師質土器は、そのほとんどが高台壇で占められるが、酸化焰焼成で土師質土器の範疇に入れても良いような羽釜3片も出土している。灰釉陶器はドブ漬け作りの良い高台壇(1)と蓋(5)があり、ともに精選された胎土をもち白芯というふくわしいものである。

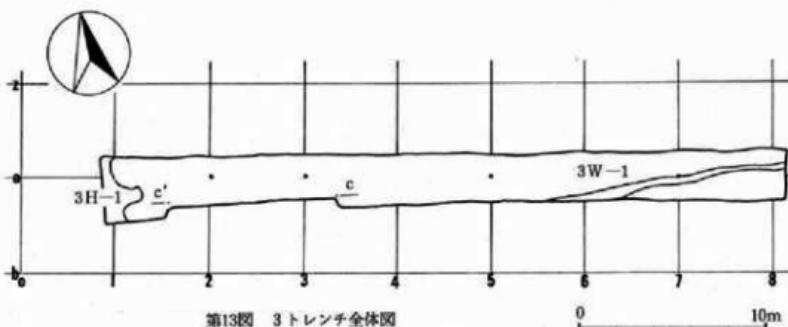


第12図 2トレンチ出土遺物実測図
(1号住1、2、4、2号住5、P-4 6、8、P-5 7、表採3)



図版2 2トレンチ出土遺物

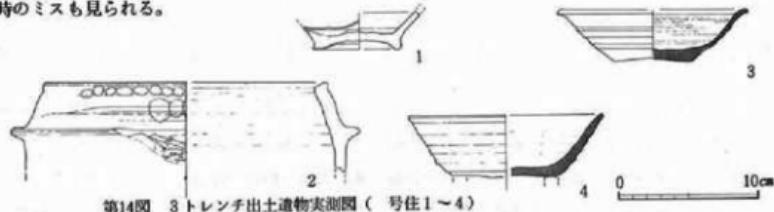
3. 3トレンチ



3トレンチは、2トレンチを西に延長した道路予定地部分にあたり、南は一段下がって水田となっている。トレンチ西端では浅間B軽石が20cm程の厚さで堆積していたが、東へ向うにつれて消えてしまい浅間B軽石の痕跡すらなくなってしまう。

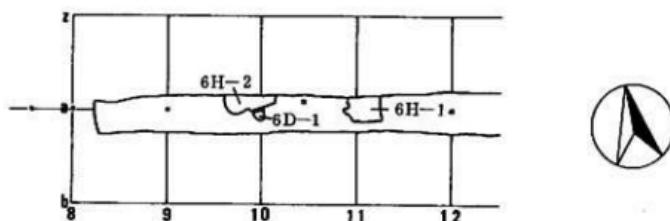
遺構は、平安時代住居跡1軒と溝1条が確認された。住居跡は、前述の浅間B軽石下50cmの間隔をおいて存在し、竈は焼土も粘土も確認されなかったが、東向きである可能性が強い。竈と推定されるところから羽釜の出土があったことも、それを裏付ける証左となろう。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、土師質土器が出土している。土師器は脚付甕の脚のみが確認されている。須恵器は高台碗と壺があり、高台碗③は軟質灰白色須恵器がほとんどで、壺には軟質須恵器②と酸化焰焼成のものがある。灰釉陶器は、ドブ潰で釉のかかったものの底部が一個体出土した。土師質土器には高台碗がある。羽釜は作りの良い酸化焰焼成のもので、羽部分には製作時のミスも見られる。

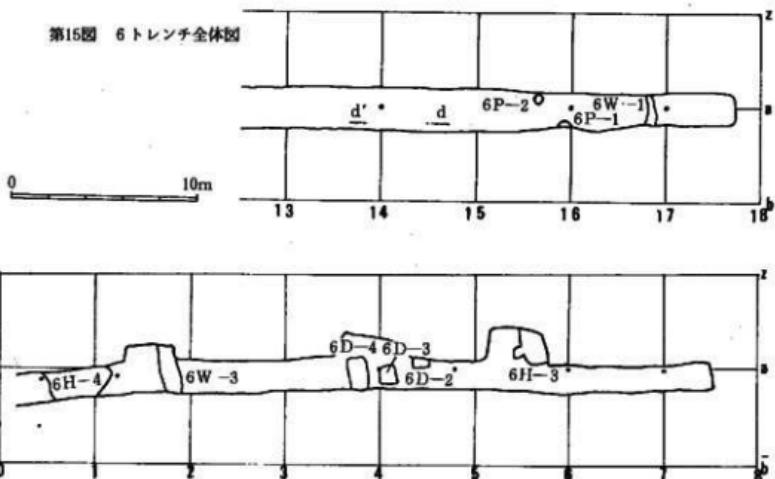


図版3 3トレンチ出土遺物

4. 6トレンチ



第15図 6トレンチ全体図

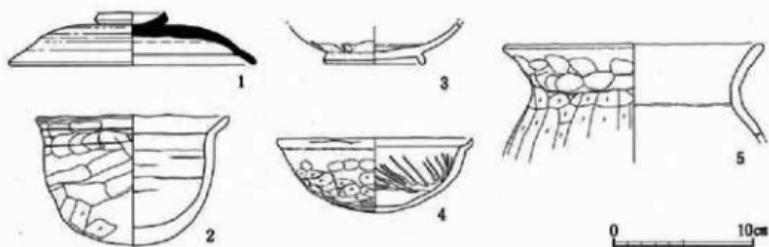


6トレンチは、東西約90mのトレンチで、3トレンチの60m北にあたる。西側は表土から2m程でローム層(水成)に届くが、東へ向うにしたがってローム面までの深さは増していく。

遺構は、古墳時代住居跡1軒、平安時代住居跡3軒、大溝(断面で確認)1条、小溝1条、土坑4、ピット2が確認された。古墳時代住居はローム層を掘りこんで築かれているが、カマドは確認されなかった。平安時代住居は黒褐色土層を掘って營まれており、焼土をたよりにプラン確認を行った。溝は3本ともほぼ南北の走方向をもっているが、特に大溝は浅間B軽石がレンズ状に堆積し、3トレンチの浅間B軽石の堆積層の分布範囲とはほぼ南北線で一致しており、南へのびる大溝の存在も予想される。

遺物は古墳時代住居跡からは土師器が、平安時代住居跡からは須恵器と灰釉陶器が出土している。
 (6H-4) (6H-1.2.3)
 土師器は、6H-4では暗文のある内斜口縁環(4)があり、火を受けて赤変した小甕もある。また、表採造物ではあるがS字口縁脚付甕の脚部2片と口縁部1片が、トレンチ東側(a-5G)から検

出された。須恵器は、堅毅に焼き締められた高台輪と自然釉の上面全体にかかった蓋坏、軟質灰白色須恵器が出土している。灰釉陶器は、灰青色の薄い釉が刷けで塗られ、胎土は水窯で入念に精選され緻密である。底部はたんねんにヘラ調整を施しており、まさに白瓷というふくさわしいものである。



第16図 6トレンチ出土遺物実測図
(号住1、号住2、4、5、表探3)



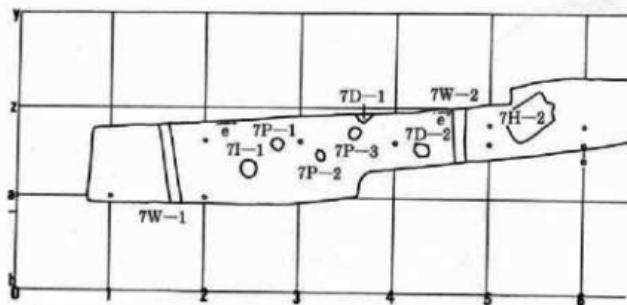
図版4 6トレンチ出土遺物

5. 7トレンチ

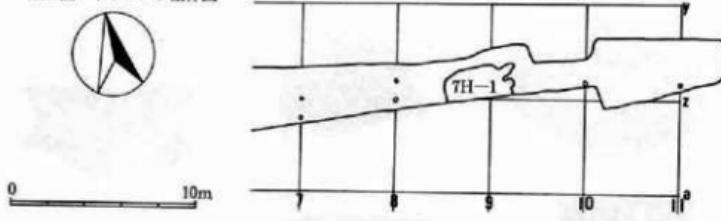
7トレンチは、足門線の付けかえ道路予定地部分で、西にのびる8トレンチとともに本遺跡地のほぼ中央を東西に横断する。生活道路がすぐ南を走っており、本来その道路部分も確認調査範囲であったが、調査対象地域からはずしたため、狭小なトレンチとなった。

遺構は、表土層（砂質の暗褐色土）とその下の黒褐色土層をはいだところで、住居跡2軒、溝2条、井戸1、土坑5を確認した。住居跡は、出土遺物量がわずかなため年代を与えにくいが、住居プラン等から奈良時代住居（H-1）と平安時代住居（H-2）と思われ、それらは約15mを隔てて築成されており、竈は2住居ともほぼ東を向いている。溝は15mの間を隔ててほぼ南北に走り、井戸、土坑はその2条の溝（W-1、W-2）の間にうまくおさまっている。

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、土師質土器、瓦が出土している。土師器は、7H-1から器内は薄いが体部と口縁部の境に稜を有する壺とS字口縁脚付壺の脚部が表探している。須恵器は、肩部に自然釉のかかった壺と口唇部にいぶしのかかった蓋壺や高台碗がある。灰釉陶器は、高台碗が2個体出土しており、どちらもドブ潰けによるものと考えられる。土師質土器は、底部右回転糸切り痕を有する非常に粗雑な作りの壺が出土している。また、布目瓦の破片1もある。



第17図 7トレンチ全体図



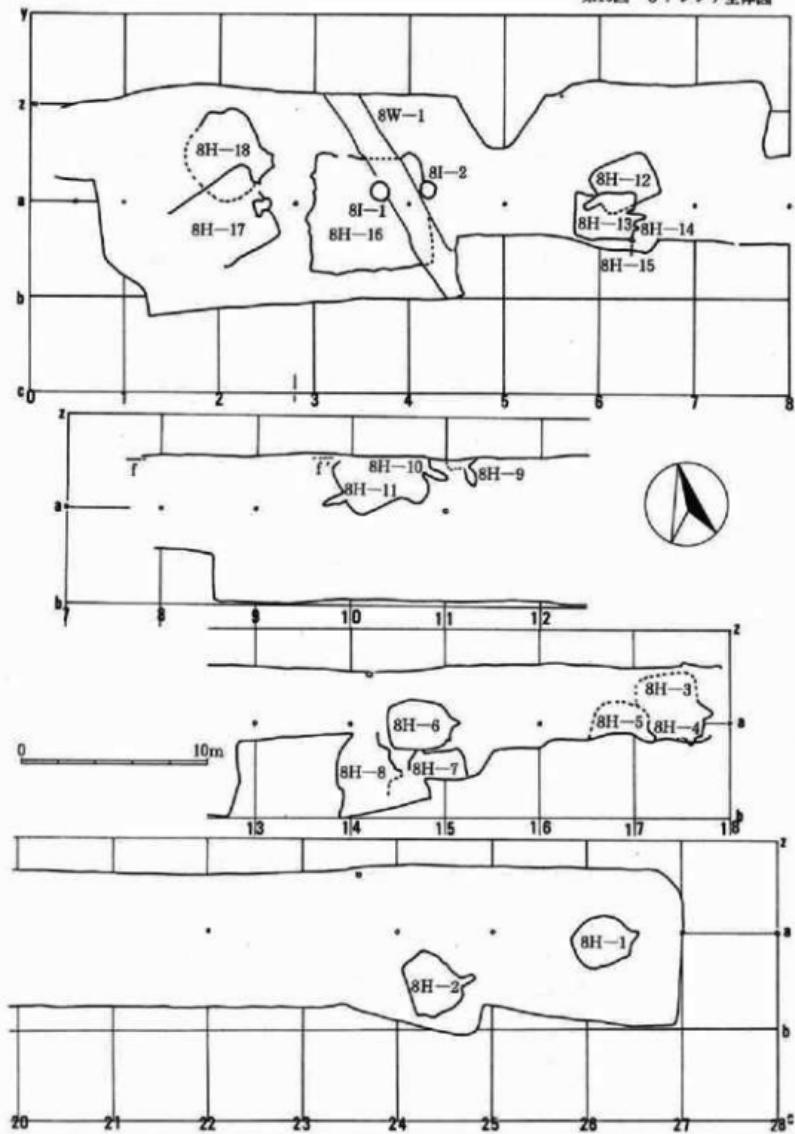
第18図 7トレンチ出土遺物実測図
(号住3、表探1、2、4)



図版5 7トレンチ出土遺物

6. 8トレンチ

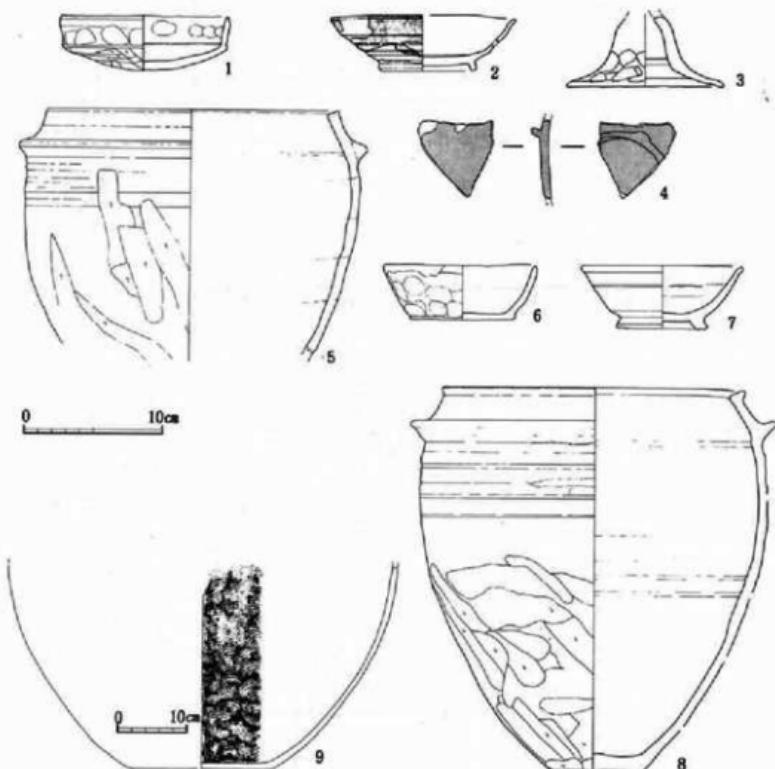
第19図 8トレンチ全体図



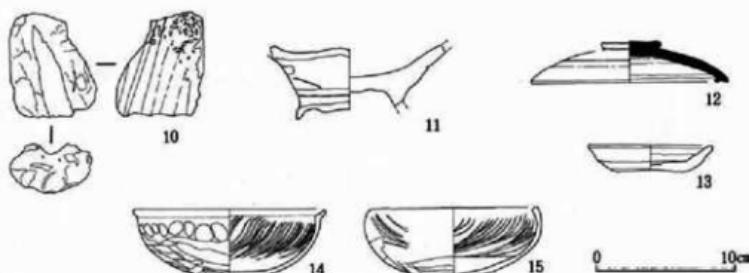
8トレンチは、7トレンチを西に延長した幹線道路予定地部分（足門線）で、約130mの長さのトレンチである。土層をみると、西縁部では1mでローム層まで達するが、東へ進むにしたがい6トレンチと同じように深くなる傾向にある。

遺構は、古墳時代住居跡4軒、平安時代住居跡11軒と溝2条、井戸2が確認された。古墳時代住居は、主にトレンチ西側に分布し、トレンチ中央から東にかけては平安時代住居が点在している。竈の設置は、古墳・平安を問わず東壁に多いが、重複している8H-14、15と8H-16、17は、古いと考えられる住居が東壁で凝灰質砂岩や瓦の構架材を使用し、新しい住居は西壁から直接張り出していた。

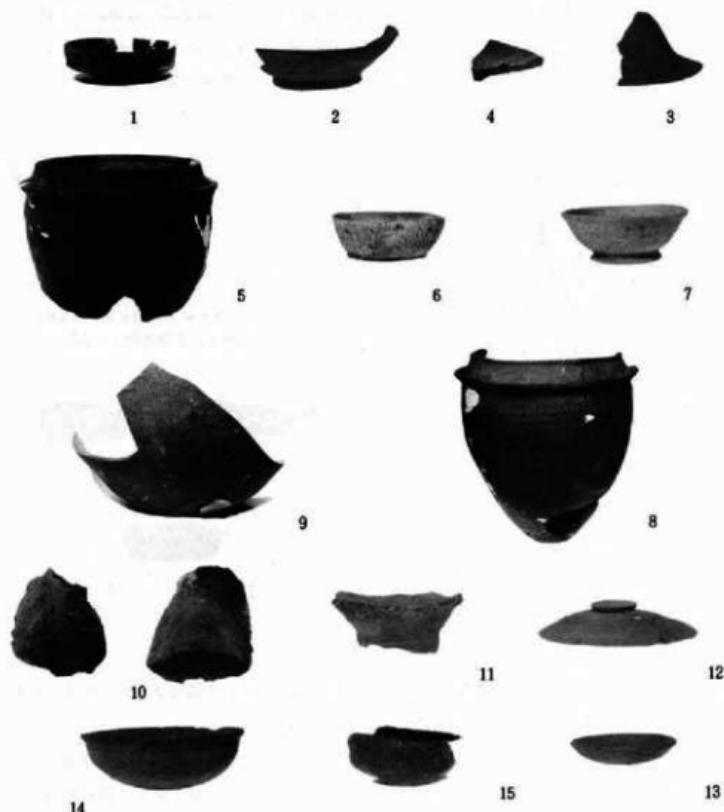
遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉、土師質土器と多岐にわたっている。このトレンチの出土遺物で特に注目されるのは、羽釜の出土量の多さと緑釉の出土である。緑釉は淡緑色の美しい発色で、器形は高台皿であろう。生産地については後日の検討に待ちたい。



第20図 8トレンチ出土遺物実測図(1)
(8号住1、9号住2、3、4、10号住6、7、8表探9)



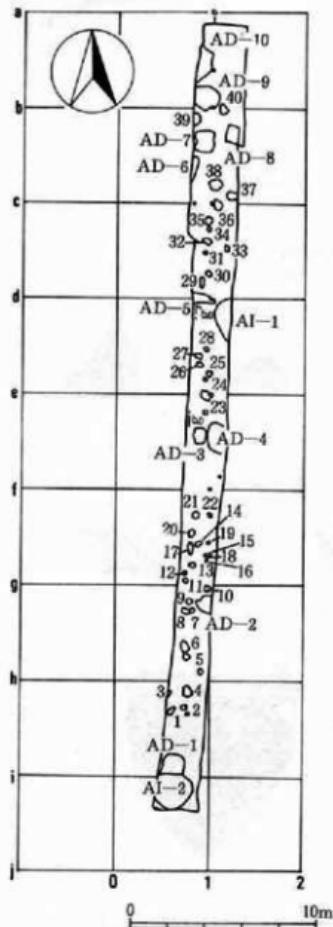
第20図 8トレンチ出土遺物実測図 (2)
(14号住13、15号住11、19号住12、21号住14、15)



図版6 8トレンチ出土遺物

7. Aトレンチ

第21図 Aトレンチ全体図



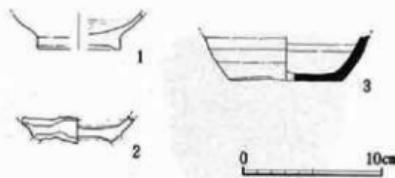
Aトレンチは、本遺跡地を南北に縦断する道路予定地部分の最南端で、1、2トレンチの西端部に位置する。

造構に住居跡はなく、井戸2、土坑10、ピット40を数える。2m強の狭いトレンチのために、ピット間の関連は把握できなかった。

遺物の散布量は非常に少なく、土師器、須恵器がわずかに出土しているのみである。

土師器高台碗(2)は、酸化焰焼成の堅い焼きで、底部にヘラ調整痕をもつ。須恵器には高台碗と环がある。

高台碗(1)は、底部右回転糸切り未調整で、环は底部回転ヘラ切り未調整で焼成堅緻である。



第22図 Aトレンチ出土遺物実測図
(4号土坑1、5号井戸2、表探3)



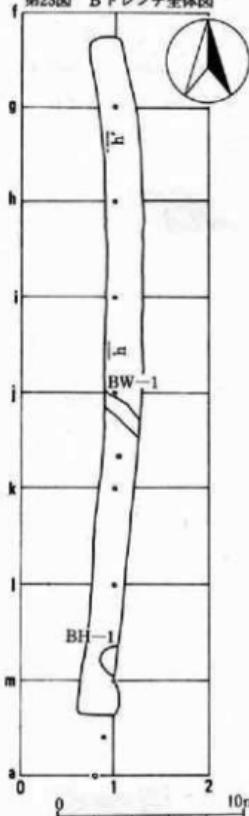
図版7 Aトレンチ出土遺物

8. Bトレンチ

Bトレンチは、Aトレンチを北へ延長した道路予定地部分である。地権者の承諾を得られない部分もあったために、かなり湾曲したトレンチとなつた。

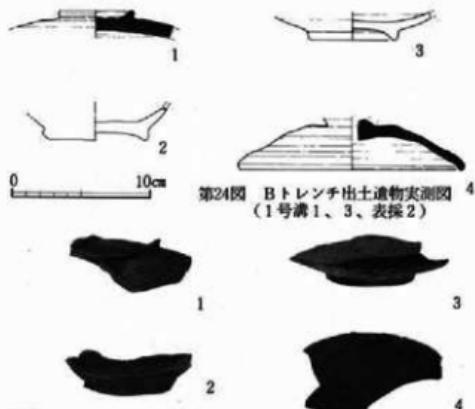
造構は、トレンチ南端に平安時代住居跡1軒とその北約15mのところに溝1条が確認されたのみである。住居跡は、西壁と北壁が確認されたのみで全体のプランは不明である。溝は北西から南東方向へ走っている。

第23図 Bトレント全体図



遺物は、須恵器と土師質土器が出土している。須恵器は、溝から須恵壺が2個体（1、4）出土し、1は自然釉がかかり焼成堅紙であり、2も焼成良好であった。また、土師質土器は高台皿（3）と高台縁（2）が出土した。高台皿は、底部右回転糸切り後ナデの形跡が認められる。

住居跡の分布について見てみると、1、2トレントで北へ広がると予想された集落の西限はBトレント付近であるかもしれない。



図版8 Bトレント出土遺物

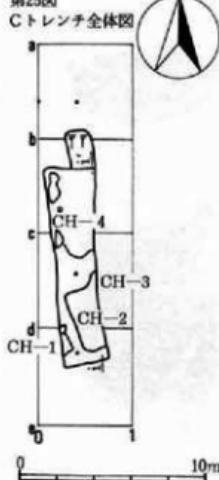
9. Cトレント

Cトレントは、6トレント西端に直交して南北に伸びる、わずか10mのトレントである。西側50mには、人家を隔てて牛池川が迫っている。

造構は、ローム面まで掘り下げて初めて4軒の古墳時代住居跡と井戸が確認された。その中で、竈が確認されたのはCH-1で、白色粘土を用いて構築されていた。CH-2とCH-3は重複しており、CH-2は全体の左にあたる西側部分が現われ、CH-3はCH-2に切られて壁がわずかに確認されたのみである。CH-4は南壁と西壁が確認されたが、かなり大きな住居跡であることが予想される。CH-4を切っている井戸は、セクションを検討するとかなり上からの掘りこみであることから、かなり時代の下ることが推定される。

遺物は土器のみで、長脚壺、S字口縁壺、小壺、壺が出土

第25図



した。CH-1の竈付近の出土量が多く、図示した1~5はCH-1の出土遺物であり、特に3の瓶と4の甕は使用状態を示すかのように重なって出土した。CH-3のS字口縁甕のS字は、形が明瞭で、だれた印象を受けない。また6は、口唇部の整形に堪としては疑問だが、他の器形にもあてはまらないのであえて堪としておく。CH-2、CH-4の遺物について図示しえなかつたが、両住居から内斜口縁で暗文を有する甕の出土があったことを明記しておく。



第26図 Cトレンチ出土遺物実測図
(1号住1、2、3、4、7、3号住5、6)



図版9 Cトレンチ出土遺物

10. G レンチ

G レンチは、現在通学路となっている落ち込みに沿って南北に展開している。このあたりでは、1 m余でローム面に達する。

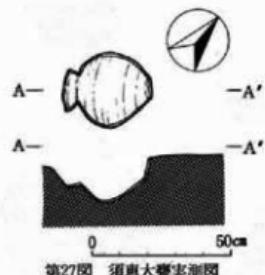
遺構は、古墳時代住居跡7軒と平安時代住居跡1軒、古墳時代住居を切り平安時代住居を覆土上にのせている溝1条と小溝1条および井戸1がある。

古墳時代住居は、ほとんどの住居が同様なプランをもって構築されている。壁は地山を掘り残したもの（GH-2, GH-4）と白色粘土を使用したもの（GH-1, GH-5）がある。平安時代住居は、竈構架材に砂質凝灰岩を使用しており、この付近特有の状況を示している。

遺物には土師器と須恵器がある。土師器は、長胴壺、S字口縁壺の口縁部(7)、内斜口縁暗文壺(1, 5)、内わん口縁壺(2, 6)、手捏ね土器(3)、高环(8)がある。

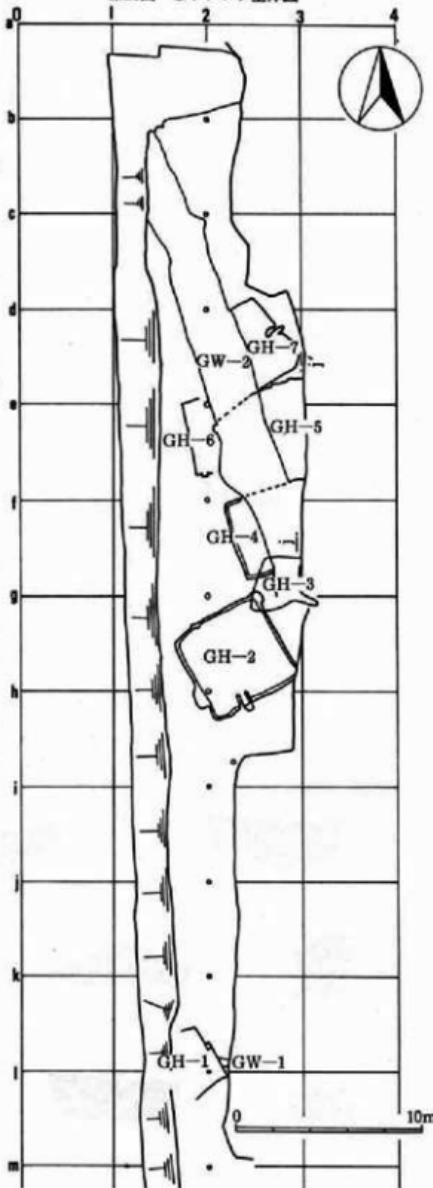
須恵器は、たたき目のある大甕(3)と底部回転ヘラ切り未調整で自然釉のかかった壺、擬宝珠型のつまみを有する蓋壺がある。

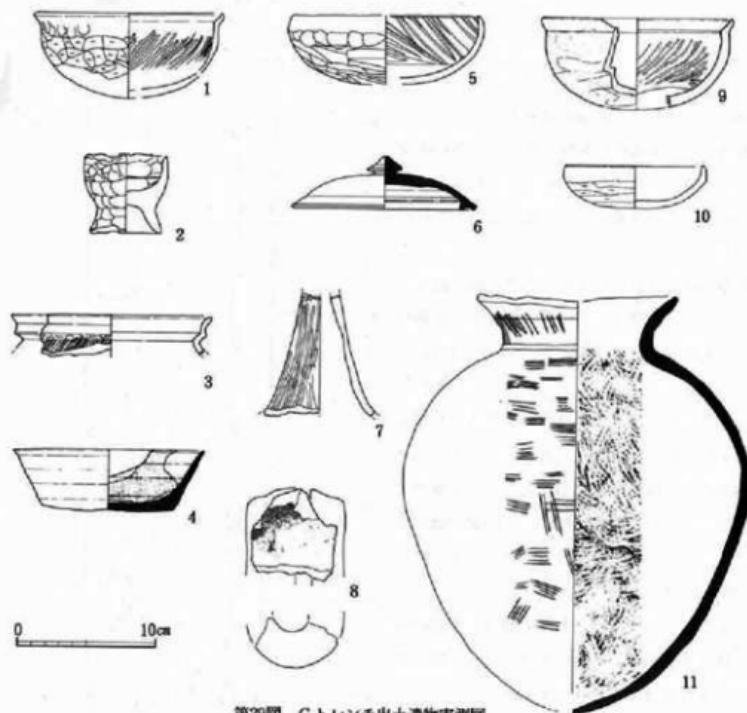
その他、溝内部(GW-2)から、製鉄址遺構の存在を予想させる羽口や鉄滓の出土があった。



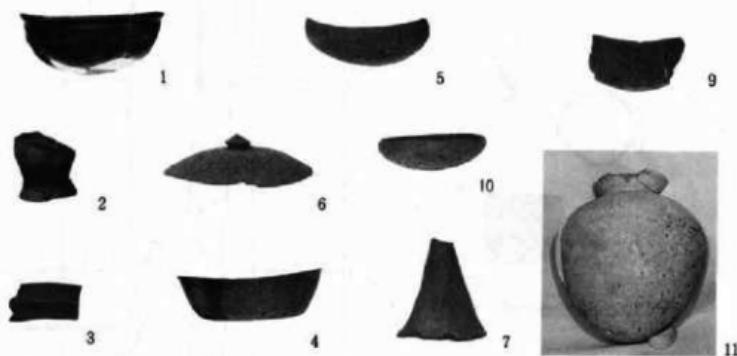
第27図 須恵大甕実測図

第28図 G レンチ全体図





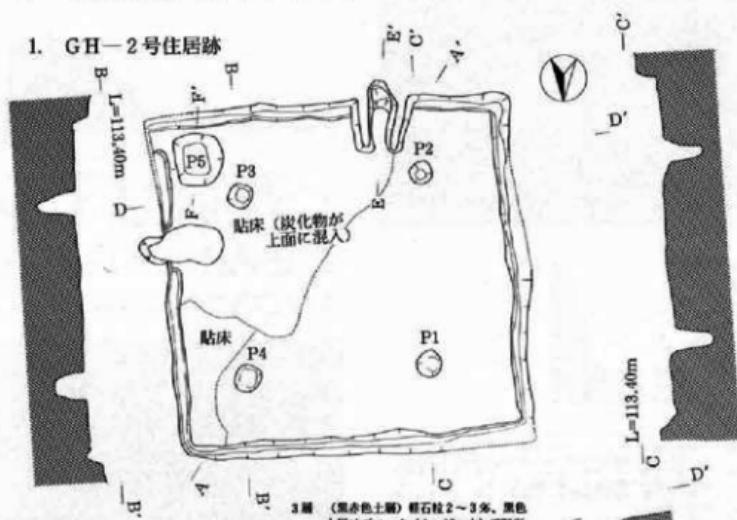
第29図 Gトレンチ出土遺物実測図
(23号住1、2、5、9、25号住6、10、27号住3、4、7、表掲8、11)



図版10 Gトレンチ出土遺物

V 発掘遺構 (Gトレンチ)

1. GH-2号住居跡



1層 (褐色土層) ロームブロ

ック (1~5cm大) を10

~20%、礫石粒 (C, F

Pかく、0.2~0.5cm大)

を10~20%含む。粒子粗

く、硬くとボソボソする。

硬く締っている。

2層 (褐色土層) ロームブロック粒

子10~15mm、礫石粒 (0.2~1

cm大) を5~10%含む。粒子は

粗く硬く締っている。

2a層 (褐色土層) 磚石粒 (0.2~1cm大) 5

~10%含む。ロームブロックは少ない。

粒子は粗く硬く締っている。硬くとボソ

ボソする。

2b層 (褐色土層) 白色灰と黑色灰が互層をな

す。粒子は細く、粘性はない。

2c層 土厚5cm、礫石 (C, F

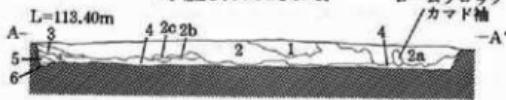
Pかく、0.2~0.5cm大) 含む。硬く

締っている。

3層 (黒赤色土層) 砖石粒 2~3mm、黑色
土層はブロック (1~10cm大) で70%,
粒子は細く、混入物も少ない。

4層 (褐色土層) 上層に比べ磚石少なく5
%未満。ローム粒 3%、粒子や細か
い。粘性なくボソボソしている。

ロームブロック
カマド跡



5層 (褐色土層) 7層に比べ泥
粒を帯びる。土質は7層に
似る。

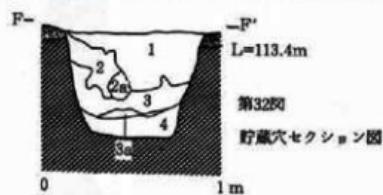
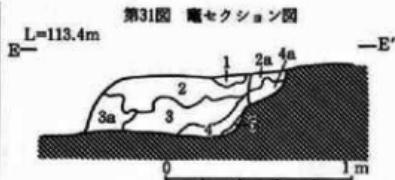
6層 (黄褐色土層) ローム粒子70~80%含
む。周囲を覆う土。硬くてボソボソし
ている。

0 2m

第30図 GH-2号住居跡



図版11 2号住居跡全体、遺物出土状況



- 1層 (褐色土層) 粘土が含まれるためやや赤褐色を帯びる。粒子細かく粘性はほとんどない。堅く締っている。
2層 (黒褐色土層) 粘土5~10%、ペリス(CP?) 10~15%含む。粒子細かく粘性は高い。ボソボソした感じ持っている。
3層 (褐色土層) 粘土層、天井漆の崩落土。上部に1層を覆うが粘性は低い。
(黒褐色土層) 2層に比べペリスが少ない。
3a層 (黒褐色土層) ロームブロック(2~3cm) 10~15%含む。
4層 (黒褐色土層) 沈化物5~10%含む。粘性やがあり、締っている。
4a層 (灰白色灰層) 純灰層。
5層 (黒褐色土層) 粘土、沈化物10~15%含む。粘性やあり、締っている。



図版12 2号住貯藏穴

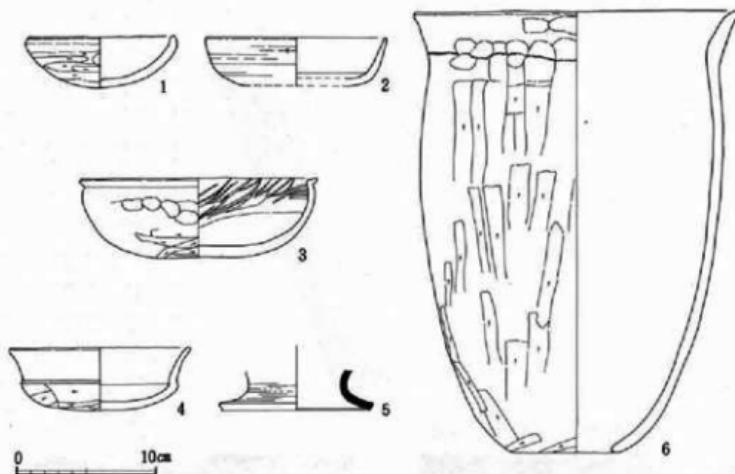
遺構 G トレンチのはば中央に位置し、東南隅を2号溝によって切られている。平面形は整美な方形を呈し、その規模は東西5m、南北4.9mを測る。主軸方向はN-150°-Eを示す。床面は黒褐色土で全体にわたって貼床が施されており、その厚さは4~5cmである。確認面からの壁高は25~30cmを測り、壁溝は幅15cm、深さ5cm程度でめぐっている。P₁は貯蔵穴で、東南隅に75×70cm、深さ50cmの南北に長い長方形プランが検出されている。P₁~P₄は主柱穴であり、4本とも径35~40cm、深さ50~60cmを測る。主柱穴は4本とも対角線上にあり、対角線の交点を中心として描いた円周上にものっている。

竈 南壁中央西寄りに設けられており、煙道部をわずかに壁外へ突き出し、住居内へ大きく張り出した袖(黒褐色土とロームで築かれている)をもっている。焚口幅20cm、奥行1mを測り、燃焼部から煙道部へかけて急激な傾斜をみせる。煙道部は焼土がみられず、煙道部は良く焼けている。

遺物 遺物の分布は、東壁中央部から南壁の東半分に沿った付近が多い。特に、2号溝によって切られた部分の遺物は、図示した2のように後世の所産で、流れ込みによるものと考えられる。1は覆土中、3・4は南壁中央、6の瓶は東壁中央北寄り、7の須恵器はP₃とP₄の間で出土した。この住居出土の环は、内斜口縁の和泉型环と有縫で口縁の外斜する鬼高型环に、もう少し時代の下がる环等ヴァラエティに富んでいる。



図版13 2号住出土遺物



第33図 G H-2号出土遺物実測図

第5表 G H-2号出土器観察表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	整 形 (外面)	整 形 (内面)	備 考
1	坏	口径 10.4 底径 6.1 器高 3.6 最大径 10.9	口縁部は内湾する。 底部に丸底	口縁部 横ナデ 体表部 ヘラ削り	横ナデ	色調 胎土 赤茶褐色 小砂粒、微小石礫 含む 焼成 良
2	須 恵 坏	口径 12.9 底径 7.8 器高 3.4	口縁部は直線的 に広がる。 底部、平底	口縁部 横ナデ 底 部 ヘラ削り	横ナデ	色調 胎土 灰色 密、若干の小砂粒 含む 焼成 良
3	坏	口径 16.9 底径 9.0 器高 5.6	口縁部は外反し 口縁部は内湾する。	口縁部 横ナデ 体 部 指圧痕あり 底 部 ヘラ削り	体部 ヘラ磨き (研磨)	色調 胎土 赤茶褐色 小砂粒含む 焼成 良
4	坏	口径 13.0 底径 8.4 器高 4.4	口縁部は外反する。 壁は明瞭	口縁部から体中部ま で横ナデ 底 部 ヘラ削り	横ナデ	色調 胎土 橙色 若干の小砂粒含む 焼成 良
5	瓦 器質 土器	底径 10.8	脚部の広がりが 大きい。	回転ロクロ成形 指圧痕あり	ロクロ成形	色調 胎土 灰色 小砂粒含む 比重の小さい胎土 焼成 良
6	瓶	口径 23.4 胴最大径 22.2 頸部最小径 21.1 器高 31.3	口縁 部は 突い 「く」の字形を呈 し、外反する口 縁部の器内側 	口縁部から頸部 横ナデ 指圧痕あり 体 部 横方向へラ 削り	口縁部 横ナデ ヘラ削 り	色調 胎土 茶褐色 小砂粒含む やや良い

2. GH-7号住居跡

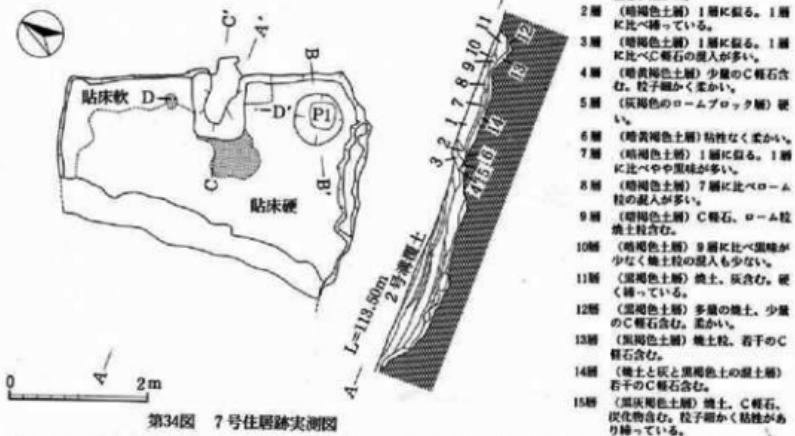
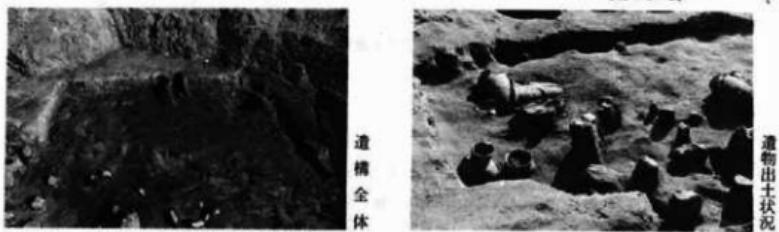


図34図 7号住居跡実測図



図版14 7号住構全体、遺物出土状況、竈

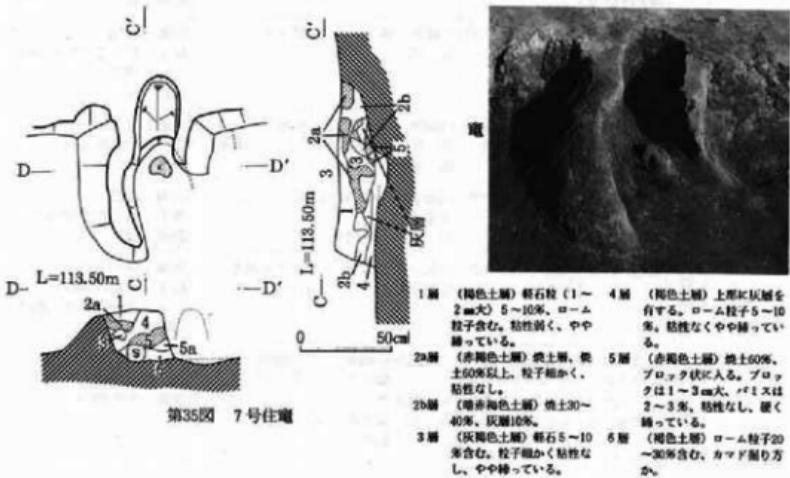
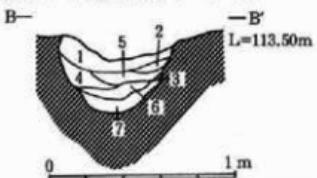
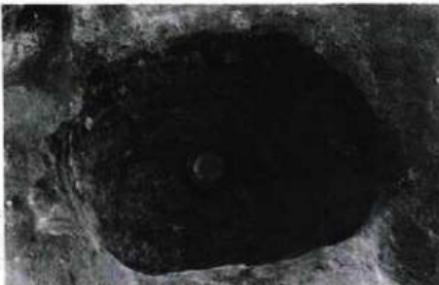


図35図 7号住居

第36図 7号住貯藏穴セクション図



- 1層 (C) 黄褐色土層 C石(小豆大), 少量のローム粘, 硬かい
白色の浮石含む。歯かくら粘性がない。
2層 (黄褐色土層) 1層よりも堅度が少ない。歯嵌のC輕石, 白
色の浮石含む。歯かくら粘性がない。
3層 (黄褐色土層) 2層よりも堅度が少ない。若干のC輕石, 白
色の浮石。1層ほど浮石。歯かくら粘性がない。
4層(d) (黄褐色土層) 層に似る。より多く浮石がある。
5層 (黄褐色土層) 1層よりも堅度が少ない。多量の黄褐色
1-2cm。オリーブ緑色ローム粒, 若干のC輕石。白色の浮
石含む。やや熱性あり。



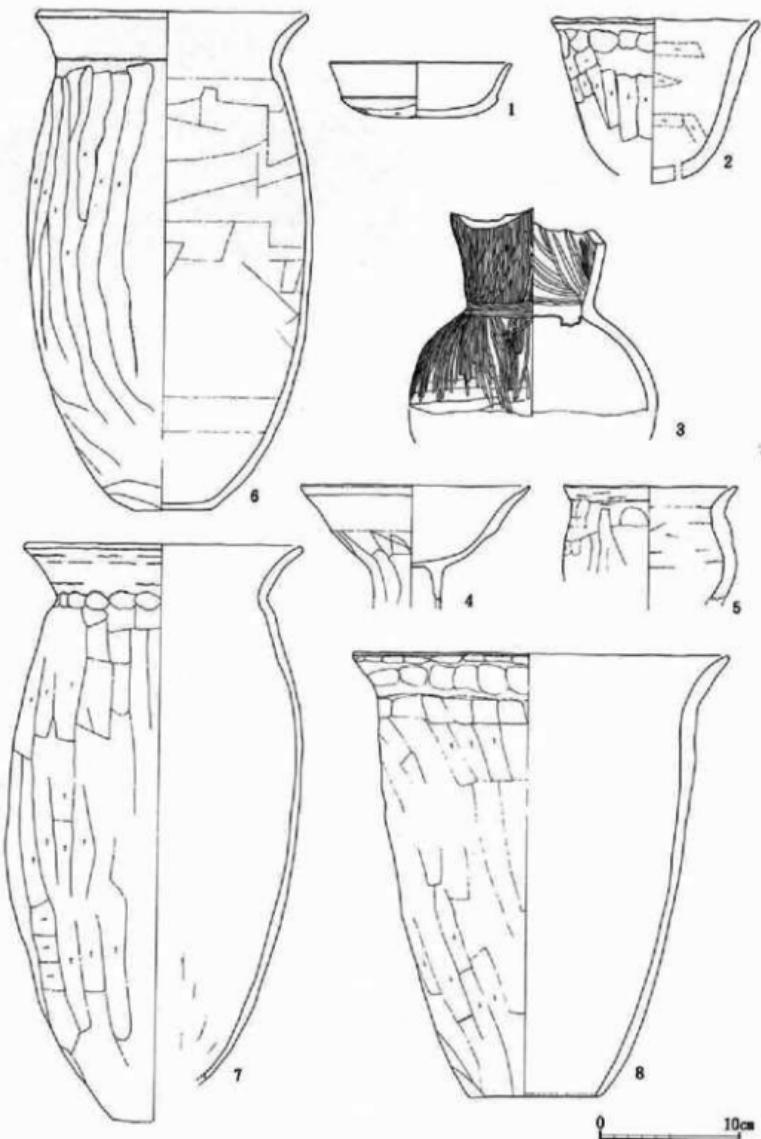
圖版15 7骨住貯藏穴

遺構 Gトレンチ中央からわずか北よりの本住居は、その西側半分を2号溝によって削られている。規模は東壁が4.3mを測れるのみである。主軸方向はN-74°Eを示す。確認面からの掘りこみは各壁とも20cm内外で、壁面はほぼ垂直である。床面は全面にわたって貼床が施され、住居中央では硬く、東壁から北壁際では軟かい。貼床の厚さは4cm程度で、床面全体に緩やかな起伏が見られる。柱穴、壁溝は検出されなかったが、東南隅に貯蔵穴が設けられ、径70cm、深さ45cmの円形プランを呈し、底部からは土師壺一個体が正立して出土した。

■ 東壁中央にあり、煙道部を僅かに壁外へ突出させ、黒褐色土とロームブロックの袖を住居内へ大きく張り出している。焚口幅は右袖が欠落しているため定かでないが、奥行は1mを測る。燃焼部から煙道部へ緩やかに移行し、壁外へ突出する部分で急に立ち上がり、燃焼部は中央に川原石の支柱を有する。また、燃焼部、煙道部双方とも良く焼けており使用頻度の高さが窺える。

遺物 遺物の出土量が多く、遺存状況も良好であった。平面分布は、竈と貯蔵穴の位置する南東隅に多かった。図示した遺物のうち、1の壺は貯蔵穴底部から、6、7の長胴甕と5の小甕、8の甕は貯蔵穴上面から折り重なって検出された。3の壺と4の高壺は竈の右脇から、38の多孔の壺は竈の前面から出土した。出土遺物は計50点の土器片が記録され、復元できた遺物も多い。壺1は須恵の模倣壺であり、外縁を有し口辺は外斜して器高が低い。甕6、甕9、甕8はそれぞれ長胴化傾向を見せはじめるが、甕6、9は肩部に最大径をもっている。土器様相から、西大室遺跡群118号住居出土の土器群との類似を指摘できるが、和泉型高壺4や壺型土器3の存在を考慮にいれると、118号住居より年代を遡らせる必要がある。以上のことから、本住居の土器群は鬼高I期末から鬼高II期初頭の所産と考えて、5世紀第三四半紀を中心とした年代を与えることができよう。

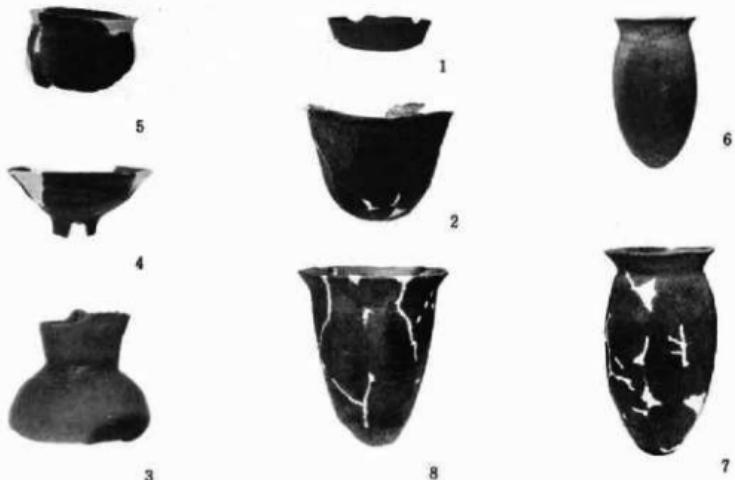
本住居の住跡構造上の特徴としては、無柱穴住居で竈右隅に方形貯蔵穴を有するという点にある。一般に、鬼高峰期の特徴としてあげられるのは、G H-2号住のように柱穴を対角線上及び対角線の交点を中心とした円周上に配置するという、みごとに定形化された整美な柱穴配置のタイプは、鬼高峰期のみならず、弥生時代、土師時代を通じて竈穴住居における柱穴配置の基本である（「房総における鬼高峰期の研究」）。鬼高峰期における無柱穴住居の類例は非常に数少ないが、千葉県新開遺跡6号住や大篠塚遺跡8号住に認められる。無柱穴住居は概して小規模な住跡が多いようであり、その系譜が国分期になって主流となる事実は本遺跡地でも認められる。



第37図 G H-7号住出土遺物実測図

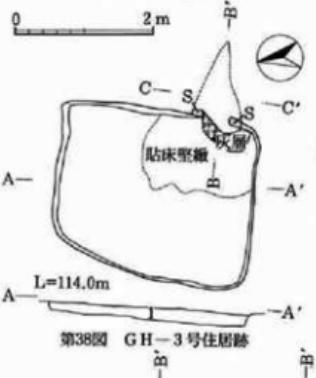
第6表 GH-7号出土器觀察表

拂図番号	器種	法量	器形の特徴	整形(外観)	整形(内面)	備考
1	壺	口径 13.2 底径 8.8 器高 3.9	口縁部は外反し 縁線は明瞭	口縁部 橫ナデ 底 部 ヘラ削り	口縁部 橫ナデ 底 部 ナデ	色調 棕茶褐色 胎土 小砂粒含む 焼成 良
2	瓶	口径 5.0 底径 11.8	口縁部は外反する。	口縁部 橫ナデ 体 部 ヘラ削り 口縁部、体部に指圧痕あり	ヘラ磨き(部分的にヘラ削り) 口縁部に指圧痕あり	色調 棕茶褐色 胎土 小砂粒、微小石礫含む 焼成 良
3	壺	頸径 9.2 最大底径 17.8 残高 14.8	頸部は直線的でやや外反する。体部は球状を呈する。	体表部 ヘラ削り 後、研磨	全体に縦研磨の痕跡あり	色調 棕茶褐色 胎土 小砂粒、4.7mm石礫含む 焼成 良
4	高壺	口径 16.7 底径 8.0 残高 8.1	口唇部や内湾し、口縁部は外反する。 底部の縁線は明瞭、鶴脚式輪継的	口縁部 橫ナデ 体部から脚部にかけてヘラ削り	口縁部 橫ナデ 体 部 ナデ	色調 棕茶褐色 胎土 小砂粒、若干の小砂粒含む 焼成 良
5	小型 甕?	口径 12.4	口縁部「く」の字形を呈し、外反する。	口縁部 橫ナデ 体 部 ヘラ削り 指圧痕あり	口縁部 橫ナデ 体 部 ヘラ磨き(横研磨)	色調 棕茶褐色 胎土 小砂粒含む 焼成 良
6	甕	口径 19.6 底径 5.4 器高 35.7	口縁部は「く」の字形を呈し外反する。最大径は胴央部よりやや上方に位置する。	口縁部 橫ナデ 体 部 ヘラ削り	口縁部 橫ナデ 体 部 ヘラ削り	色調 棕茶褐色 胎土 小砂粒、小礫含む 焼成 良
7	甕	口径 19.7 底径 41.3 器高 41.3	口縁部は「く」の字形を呈し外反する。最大径は胴央部よりやや上方に位置する。	口縁部 橫ナデ 體 部 指圧痕あり 体 部 ヘラ削り	ナデ	色調 棕茶褐色 胎土 小砂粒含む 焼成 良
8	瓶	口径 27.1 底径 9.4 器高 31.7	口縁部はゆるく外反する。	輪組み成形 全面ヘラ削り 整形後口縁部横ナデ	全面ヘラ削り 整形後口縁部横ナデ	色調 棕茶褐色 胎土 小砂粒含む 焼成 良



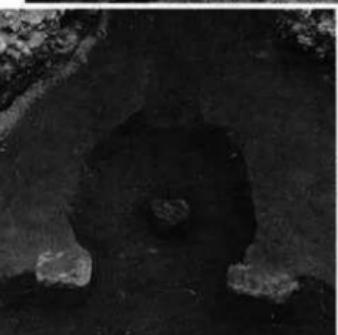
図版16 7号出土遺物

3. GH-3号住居跡



第38図 GH-3号住居跡

1層 (須崎色土層) ややオーリーブ褐色
がかかる。粗石 (1~5mm
位大) 20~
30%含む。
礫層はない
が見ついて
いる。粘性は
わざかにあ
る。



1層 (須崎色土層) 松子は粗く砂質的な感じ。覆土の土層と共通。バニス (0.5~2mm大) 5%含む。

2層 (須崎色土層) 松子は粗く粘性なし。1層に比べバニスを含まない。鐵土、炭化物2~3%含む。

第39図 3号住居



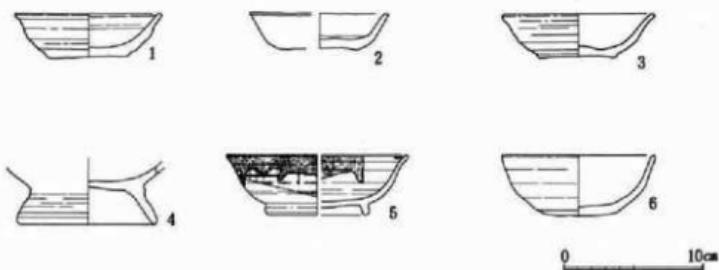
造構GH-2号住居跡の東に近接して位置し、2号溝の覆土上に築かれている。規模は東・西壁2.9

m、北壁2.1m、南壁2.3mを測り、平面形は不整方形を呈する。主軸方向はN-105°-Eを示す。壁高は確認面から、東・西壁で10cm、南・北壁で14cmあり、壁はほぼ垂直に立っている。床は全面に貼床が施されており、特に竈周辺が堅緻である。壁溝、柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

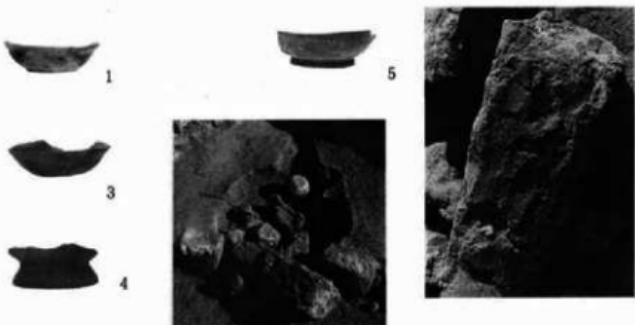
竈 東壁南寄りの壁外に構築されたいわゆる外竈である。焚口部からの全長は90cmで、焚口幅は40cmを測り、燃焼部から煙道部への緩やかな立ち上がりを示す。支柱は不整な六面体の砂質凝灰岩で、燃焼部中央に据えられている。構架材や袖石にも、砂質凝灰岩の切石が用いられている。左の袖石は、縦17cm、横14cm、厚さ10cmを測り、上端は平らで下端は削れて赤化している。右の袖石は、縦23cm、横17cm、厚さ10cmである。それらの構架材や袖石には、鉄製工具による工具痕が見られる。

遺物 土器の平面分布は、まばらではあるが住居全体にわたっている。図示したかわらけ状の环1・3はいずれも、竈燃焼部内から出土したものである。2の灰釉陶器は竈前面から出土し、4の脚付壺は北西コーナー付近で出土した。

図版17 3号住居構造全体、遺物出土、電



第40図 G H-3号住出土遺物実測図



図版18 3号住出土遺物

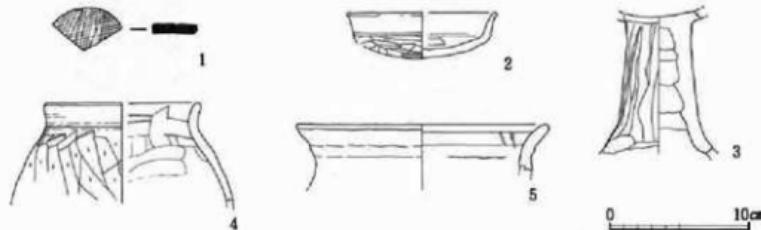
第7表 G H-3号住土器観察表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	整形(外面)	整形(内面)	備考
1	坏	口径 10.4 底径 5.6 器高 3.2	口縁部は外反する。	回転ロクロ成形 底部回転糸切り 未調整	回転ロクロ成形	色調 灰褐色 胎土 やや粗めで砂粒含む 焼成 良
2	坏	口径 9.9 器高 2.5 (推定)	口縁部はやや外反 底部はやや上げ底	回転ロクロ成形 底部回転糸切り 未調整	回転ロクロ成形	色調 淡褐色 胎土 砂粒含む 焼成 良
3	坏	口径 10.8 底径 5.6 器高 3.0	口縁部は外反する。 底部はやや上げ底	回転ロクロ成形 底部回転糸切り 未調整	回転ロクロ成形	色調 淡茶褐色 胎土 砂粒、43mmの礫粒含む 焼成 良

4	灰釉 高台付 壺	脚下径 10.0 底径 8.1	脚部はやや内湾 する。	回転ロクロ成形 底部回転糸切り後高 台貼付、さらにロク ロによる高台接合部 調整	回転ロクロ成形	色調 胎土 焼成	灰色 砂粒、42mmの裸粒 含む 良
5	高 台 付 壺	口径 13.0 底径 7.5 器高 4.3	口縁部は外反す る。	回転ロクロ成形 高台部貼付後接合部 及び底部ロクロによ るヘラ調整、灰釉ハ ケ塗り	回転ロクロ成形	色調 胎土 焼成	粒子細かく密 若干の疊含む 良
6	环	口径 10.8 底径 器高 4.3	口縁部はわずか に外反す。	右回転ロクロ成形 底部回転糸切り 未調整	回転ロクロ成形	色調 胎土 焼成	赤茶褐色 砂粒含む 良

4. GW-2号溝

GトレンチをN-20-Wの方向性をもって北西から南東へ走り、8トレンチをも横切って調査区域外へ至っている。2号溝はGトレンチのほとんどの住居と重複し(1号住居を除いて)、重複したいずれの住居よりも新しい(3号住居は2号溝よりも新)。溝の幅は、およそ2.5m、深さは確認面から30cm内外を測る。断面は、上部を削平してあるため不明だが、U字形を呈していたことが予想される。覆土は9層を数えることができ、砂層とノロ層とが交互に堆積し水の通った様子が窺える。また、そのことは、溝の底面が水の影響を多分に受け粘土化した硬化ロームとなっていることからも理解される。遺物は、図示した2~5の壺、高壺、甕と1の須恵製品とでも呼ぶべき須恵器の二次利用品が注目される。類例に清里陣馬遺跡26号住居の研磨玉石と耕113号の円形粘土板がある。

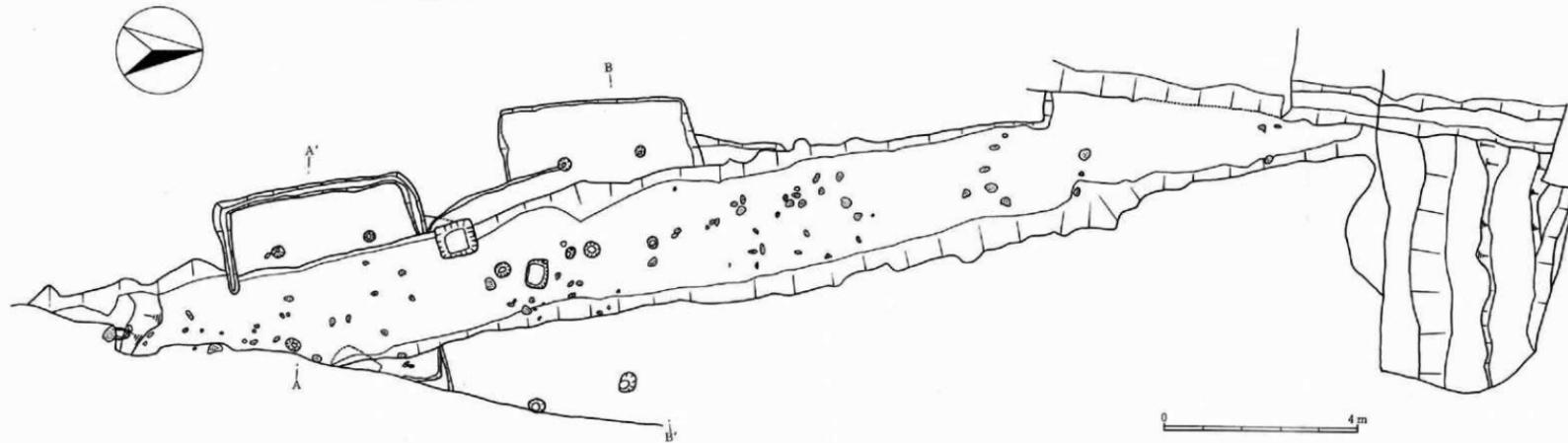


第41図 GW-2号溝出土遺物実測図



図版19 2号溝出土遺物

GW-2号溝平面図



VI 結語

元總社明神遺跡の確認調査は、前章までに述べたような成果を得た。

本遺跡地に隣接する地域の調査は、上野国府発掘調査が昭和36年～40年にかけての群馬大史学第⁽¹⁾二研究室によるものと、前橋市教育委員会が国の補助を受けて昭和41年～43年にかけて行ったもの⁽²⁾がある。群馬大史学第二研究室の調査では、前橋市立元總社小学校庭と昌楽寺裏において、官衙跡と推定される掘立柱建築遺構を確認した。また、国府正庁確認のための前橋市教育委員会による調査では、人溝や土師器使用住居跡等が検出されたが、国府関係遺構の確認にまでは至らなかった。その結果、「設置当初の上野国府の位置を求むれば、それは今まで考えていた範囲を西方にずらすことが妥当と思え、元總社地区が有力視される。」⁽³⁾という結論が導き出された。⁽⁴⁾

その結論と今回の調査結果や関泉橋遺跡の成果から、やはり元總社地区に国府関係遺構を求めることが妥当であろう。

遺構

遺構は、利根川右岸の判別困難な土を掘りこんで築成されていたが、古墳時代住居跡15軒、平安時代住居跡30軒、土坑10基、井戸8基、溝10条、ピット50基、中世墓坑1基が確認された。

(1)住居跡について

住居跡は、土器様相をみると、石田川期から鬼高I、II期初頭までの古墳時代住居とコの字口縁甕の出現及びそれに次ぐ羽釜の盛行期を中心とした時期の平安時代住居である。⁽⁵⁾

<古墳時代住居>

遺跡地の西線に近い8・C・Gトレンチで確認されている。昭和58年2月に調査された本遺跡地の北500mに所在する関泉橋遺跡でも鬼高期住居が3軒確認されたことも合わせると、古墳時代集落はさらに北へ伸びることが予想される。該期の住居は、そのほとんどが水成シルト質ローム層を50cm程度掘りこんで築かれており、後世の住居とくらべると整美な形状を示している。

石田川期住居は2軒確認されたが、2軒とも確認調査予定地外にはみ出している上に、後世の住居跡や溝等によって複雑を受けているために、その全容の把握はできなかった。

鬼高期住居は計13軒を確認し、その大部分はしっかりととした明らかな規格性（竈、柱穴、貯蔵穴の位置、形状、数）をもって構築されていた。その中で特異なものとしては、G H 7号住の無柱穴住居があげられよう。7号住は西側半分を2号溝によって削られて、東壁が4.3mを測れるのみで、その規模については不明である。類例については、千葉県新開遺跡6号住や大森塚遺跡8号住があることは前述した通りである。⁽⁶⁾

<平安時代住居>

本遺跡地の全面に亘って確認されているが、特に遺跡地の東側半分に住居の分布が濃い。また、その分布は、Dトレンチ付近を境にして北と南の住居群に分けることができ、南の住居群はBトレンチ付近を西限としているようである。G H - 3号住は、GW-2号溝の覆土上に築成された5m弱の小住居である。この住居は、染谷川の段丘崖を供給先とすると思われる砂質凝灰岩の切石を竈

構材として利用している。また、この切石には幅3cm程の工具痕が見られ、鉄製ノミ状工具の使用が推測される。

<竈について>

元総社明神遺跡の竈は、袖の構築法から4タイプに分類される。①黒色土とロームの混土(GH-2, GH-7) ②白色粘土(GH-1) ③砂質凝灰岩の切石(GH-3) や川原石(GH-6)、瓦を利用して構築したもの(GH-12) ④袖に何も使わず地山をそのまま掘りぬいたものの4タイプである。①と②は主に古墳時代後期住居に多く見られ、③④は平安時代住居に見られる。特に瓦使用の類例は、群馬県内でも国分僧・尼寺など古代寺院周辺の平安時代遺跡ではかなり多く見られ、本遺跡地の立地の特殊性(國府推定地の東に接し、北西2km程には国分僧寺・尼寺が存在する)から考えてもうなずけるものがある。なお、8号-12号住出土の竈袖瓦は接合すると一枚の平瓦となり、完形の平瓦を袖に利用するために割ったことが窺える。

<住居(竈)の方位について>

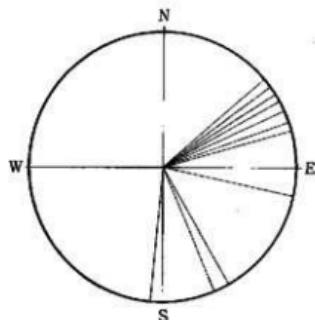
諸先学は、堅穴住居の占地及び方位を決定する条件として、自然条件と人為条件の2点をあげ、一定方向を示す住居群の同時性を考えている。

本遺跡において、住居主軸線を竈設置方向とし(住居方位=竈方向)、住居方位を図表化すれば第44図と第45図のようになる。古墳時代後期住居の方位は4例を除くと、N-65°-Eを中心約30°の範囲に分布する。これは、温井遺跡におけるDグループのあり方と類似しているが、資料の扱い方が同質でないため同列には考えられない。また、56年度に前橋市教育委員会が調査した梅ノ木遺跡における古墳時代後期住居の方位は、ほぼ磁北を中心50°の範囲に分布する。

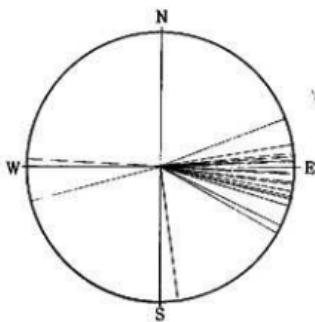
平安時代住居は、3例を除いてN-90°-Eを中心60°の範囲に分布しており、古墳時代後期住居と比べると、ほぼ30°東へ振れている傾向が看取される。

(2)その他の遺構、遺物について

その他の遺構としては、溝状遺構、ピット、土坑が確認され、遺物等も多く検出されたが、紙数の関係から、元総社明神遺跡Ⅱと合わせて検討したい。



第43図 古墳時代後期住居跡の方位



第44図 平安時代住居跡の方位

註

- (1) 尾崎喜左雄「国府推定地の発掘調査」前橋市史第1巻 1971
- (2) 「上野国府跡発掘調査概報」 上野国府跡発掘調査委員会 1966~1968
- (3) 官庁用の倉庫と推定され、これは平城宮跡の斤舎の建造物に平面图形がよく似ている。
- (4) 近藤義雄氏の推定国府域（旧説）をもとにして実施した。
- (5) 「上野国府跡発掘調査概報」 上野国府跡発掘調査委員会、前橋市教育委員会 1967
- (6) N~89~Wの方向性をもって東西に走行する上幅7m、下幅4m、深さ2mを測る大溝を確認。土師器、須恵器、白磁、瓦等8~11世紀の遺物検出。
- (7) 清里・陣馬編年の第3期類（10C前半）、清里南部遺跡群（Ⅲ）におけるD類以降
- (8) 鬼高Ⅰ期住居1軒、鬼高Ⅱ期住居2軒、大溝2条が確認されている。
- (9) P 31のG H-7号住居跡参照
- (10) 鳥羽Ⅱ遺跡北第1台地の再堆積ローム層（非常に固い）がカマド袖材の採掘所であった可能性が強い。
- (11) 前橋における竈の瓦使用例は、清里南部遺跡群（Ⅲ）及び山千瀬寺遺跡において報告されている。
- (12) 真下高幸、中束耕志「温井遺跡」関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告（群馬県教育委員会）1981
- (13) 「梅ノ木遺跡」「高田、西大室遺跡群」（前橋市教育委員会）1981

住居番号の訂正表

旧	新
G H - 23	G H - 1
G H - 24	G H - 2
G H - 25	G H - 4
G H - 27	G H - 5
G H - 32	G H - 7
G H - 34	G H - 6
G H - 35	G H - 3



1. 遺跡地全景



2. 遺跡地近景

図版22



3. 1 レンチ全体



4. 2 レンチ全体

図版23



5. 3 トレンチ全体



6. 6 トレンチ全体



7. 7 トレンチ全体



8. 8 トレンチ全体

図版25



9. A トレンチ全体



10. B トレンチ全体



11. C トレンチ全体



12. G トレンチ全体

元 総 社 明 神 遺 跡 I

昭和 58 年 3 月 25 日 印刷

昭和 58 年 3 月 31 日 発行

発行 前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目 12-1

印刷 有限会社 鳳田印刷所
前橋市大手町三丁目 6-10